

No	性	年齢	県	居住地	職業	群	生活歴・臨床経過	文献	刊年
25	男	76	04	宮城県	農業	原発	原戸籍・仙台市。剖検例。死因・汎発性化膿性脳軟膜炎。肝右葉表面に石灰化巣。『多房性型に発育せるエトコックスが中途死滅したるものなり』	1 2	1926 1928
26	女	34	04	宮城県 仙台市	主婦	原発	24歳まで青森市居住。以後、仙台。昭和39年来、雑種犬飼育。昭和47年、右腎腫瘍で入院。右腎摘出。肝腫瘍なし、肝機能正常範囲。 ・日本最初の原発性腎多包虫症。	59 60	1974 1974
27	女	47↓ 59	04	宮城県	主婦	原発	北海道居住歴・旅行歴なし。昭和50年肝腫瘍(病理:多包虫症)で肝右葉切除。昭和58年背部痛。その後、脊髄症状進行、両下肢全麻痺、排尿障害出現したため椎弓切除、骨移植。ベンゾジアゼピン投与、通院中。・多房性肝胎虫症の手術後6年あまりで骨エトコックス症を併発。骨シンチグラフィが骨痛の診断に有用だった。・平成5年より起床時頭痛、嘔吐。血清診断で多包虫抗体価上昇により多包虫症を疑い、4月腫瘍摘出術。脳多包虫症と確診。	100 111 130	1985 1986 1996
28	女	66	04	宮城県 仙台市	主婦	北海道	礼文島出身。S 24年北大2外で肝切除(多包虫症)。S 44/9後腹膜腫瘍、切除不能(北大2外)。S 49/7より血便。S 50.9.26大量吐血・下血、その後10月中旬から黄疸、出血を繰り返して11/24死亡。肝・左腎・脾多包虫症。腹部大動脈破裂。黄疸。化膿性胸膜炎。	65	1975
29	男	39	04	宮城県	農業	海外	22歳時ハリ出征。35歳時、腹部腫瘍のため開腹、肝に手拳大腫瘍。内部に空洞、透明緑黄色液。ドレーンを残し4年後再手術したが死亡。	1 2	1926 1928
30	男	39↓ 68	04	宮城県	農業	海外	戦時、北支(1941)、キカ島(1942-43)駐屯。33歳から肝腫。開腹時、左右肝葉は腫大著明、無数の小嚢胞。小片切除。組織診断にて多包虫症と決定。S 20(34歳)軍隊で手術(肝?)。1951年試験開腹で肝多包虫症(東北大武蔵外科)。1967左肝半摘(東北大佐藤外科)。S 53/7から発熱、全身倦怠。1979/6歩行障害出現。'79/9水頭症手術。55/3歩行障害で仙台市立病院入院、椎弓切除(Th1-L1多包虫病巣)以後全身衰弱、55.8.16死亡。多房性包虫症(肝・脾・後腹膜・脊髄・左肺・後縦隔・脊髄・脳幹)、肺腫瘍+気管支肺炎。	4 77 86 87	1953 1980 1982 1982
31	男	50	04	宮城県 石巻市	事務員	海外	戦時、千島駐屯。戦後ハリ7抑留4年間。48歳時から右季肋部腫瘍。49歳時開腹、肝臓病巣発見、摘出不能。50歳再手術。膿汁流出、ドレーン。術後6ヶ月で食欲良好。	23	1963
32	男	61	04	宮城県		海外	戦時、千島・松輪島駐屯。昭和49年から肝腫大。肝癌疑で治療。55年、黄疸、肝腫で入院。開腹し、嚢腫壁から多包虫体、血清反応陽性。	95	1984
33	男	36	05	秋田県	印刷工	北海道	県外居住なし。1966年頃根室に10日間旅行、毎年根室産魚干物を食べた。32歳頃から肝腫脹。肝生検で肝包虫症と診断し、手術待機中に突然ショック死。剖検で肝右葉に巨大嚢腫。左腎にも病巣。	47 56	1970 1971
34	男	49	05	秋田県	日雇夫	海外	カマヤカ方面へ出稼きの経験。45歳頃から黄疸。来院1年前頃から肝腫大。肝癌の疑いで試験開腹、肝左葉を占める巨大嚢腫。組織所見により多包虫。術後経過不明。	17 18 19	1961 1961 1961
35	男	58	05	秋田県	農業	海外	権太居住6M(1924)、カマヤカで漁業(1945)。ハリ7抑留(1945-47)。若年時から大酒家。約6年前肝腫大で数ヶ月治療(詳細不明)。昭和41年9月頃から腹部膨満感、全身倦怠、食欲不振で入院。肝腫大。肝癌疑で抗腫瘍投与、症状増悪、死亡。死後生検で多包虫。	36 40	1968 1968
36	男	50	06	山形県	大工	海外	満州に居住(1940-41)。千島出征(1943-45)、ハリ7抑留(45-47)。黄疸出現後1ヶ月で死亡。剖検。	63	1975
37	女	78	06	山形県		原発	北海道、海外流行地の旅行・滞在歴無、犬飼育歴無。'91/10嘔気、下痢、右季肋部重苦感、体重減少で受診。悪性腫瘍疑で拡大肝左葉切除術。病理:肝多包虫症。'93/3腹部CTで横隔膜直下に再発疑。同9月、横隔膜心嚢合併切除、病理:多包虫症再発。'98/6前下縦隔に再発疑、自覚症状なく経過観察。'99/10発熱、心嚢水貯留で入院。血清抗体価3200倍、心嚢水は黄褐色、混濁、虫体(-)。症状との因果関係不明。心嚢水ドレーンで症状軽快、退院。	137	2000
38	男	42↓ 51	07	福島県		北海道	昭和19年稚内で兵役、大肉を食した。30年前、礼文島在住の既往あり。昭和39年7月頃から右季肋部痛、腫瘍。肝癌の疑いで生検、多包虫症。肝右葉切除。巨大空洞壁に虫体多数。→51歳でXP肺陰影、肺転移と診断。	32 33 64	1966 1966 1975
39	男	47	12	千葉県 君津市	動物商	疑問例	16-7歳頃からてんかん発作にて服薬。1974年まで新潟在住。同年、千葉転移後も発作、がんセンターにて病巣切除術後、暫時意識回復し、経過良好だったが、術後2Wから意識障害増悪、4ヶ月後死亡。左前頭葉・左側頭葉・大脳脚・橋、包虫症の疑(病理所見不鮮明、肝は肝門部繊維症のみ)。血清診断不明。1955年肺結核形成術。1970年腎結核で右腎摘出。	66	1976
40	女	46	13	東京都 品川区	主婦	原発	戦時、長野県上田市に6M疎開。大好きで、一緒に寝ていた。昭和34年(38歳)、右横隔膜下膿瘍手術。これが原発巣か?昭和38年頃から右上下肢不全麻痺、局所痙攣。頭頂葉皮質下に鶏卵大腫瘍、切除標本で多包虫診断。	31 34	1966 1967
41	男	56	13	東京都	帽子卸商	原発	宮崎県(軍隊)1年余以外は東京在住。51歳時から肝腫大を放置。嘔吐、全身倦怠、黄疸等肝癌疑で死亡。剖検で肝・肺・小脳・胃腸・筋に多包虫。	41	1968
42	女	61	13	東京都	主婦	北海道	海外旅行歴なし。5~6歳頃2年間北海道在住。礼文島滞在なし。父親が満州で毛皮商。犬を長期飼育。昭和25年肝多房性包虫症で肝部分切除(慶大外科)。昭和36年暮~弛張熱、全身倦怠、右季肋部痛。37/2慶大外科入院。肝腫大。4/27肝腫瘍切開、排膿量550ml。膿瘍壁から包虫組織検出せず。軽快、退院。	29	1965
43	男	35	13	東京都		北海道	利尻島出身(礼文島?)。長年犬飼育。昭和41年発熱、下肢関節痛等で入院。肝嚢胞疑で肝左葉切除。組織所見で多包虫。	35	1967
44	男	24	13	東京都		北海道	18歳まで根室市在住。18歳時に検診で疑陽性、精密検診で異常なし。23歳で来院時、右季肋部硬結、血球凝集強陽性、多包虫症と診断。手術で肝右葉病巣。	61 62	1974 1975
45	男	48	13	東京都		北海道	小樽市生まれ、仕事で利尻・礼文島に出張。心窩部痛、肝腫大で入院。生検で多包虫確認。	70	1979
46	女	36	13	東京都	主婦	北海道	夕張市出身。昭和53年肝腫大で入院。肝ソチ、CT等で肝嚢胞と診断。55年初黄疸増強、再入院。肝巨大嚢胞。嚢胞吸引液から頭節?血清診断で多包虫症。死亡。	78 81	1980 1981

No	性	年齢	県	居住地	職業	群	生活歴・臨床経過	文献	刊年
47	男	56	13	東京都渋谷区		北海道	小樽出身、S23礼文島旅行一日、S24釧路旅行一日。S47年北大外科で肝包虫症手術。肝包虫症(左葉+後腹膜リンパ節)閉塞性黄疸、肝線維症、急性肝炎	83	1981
48	男	40	13	東京都		海外	昭和19年青森県大湊で召集、千島列島を転戦。昭和37年暮頃から、咳嗽、痰、全身倦怠、胆汁嚙出。XPで肝臓-気管支瘻。右下葉切除。多包虫を確認。再手術後、死亡。	21	1963
49	男	56	13	東京都		海外	戦時、千島駐屯、2ヶ月で内地送還。戦後、九州、東京在住。昭和43年肝腫瘍発見。45年、肝癌疑で入院、肝左葉切除。右肺下野にも病巣。	54	1971
50	男	50代	13	東京都	工員	海外	戦前、樺太に数年の居住歴あり。健康診断で肝疾患、S 51/8入院。黄疸指数、GOT、GPT、ALP高値。肝生検で包虫確認。補体結合陽性。末期例	67	1978
51	男	61	13	東京都	建設業	海外	シベリア抑留。本籍：東京都北区。20年来のDM。喫煙30-60/日。S60/5から咳嗽、XP右上肺陰影、61/4入院、7/3死亡。肺癌(右上葉、腺癌)転移あり。糖尿病性腎症、主死因：肺癌。肝エヒコックス症(肝右葉横隔膜面付近に径3cm/1.5cmの線維性嚢胞2、鉤を持つ包虫確認)	113	1986
52	男	47	13	東京都	出稼	北海道	北海道から出稼。1983年4月右背部打撲、疼痛増強し近医受診し肝結節性病巣を指摘され、日大板橋病院入院。腹部CTでcystic tumors。免疫診断陰性。肝生検で線維化+石灰化巣発見するも確診に至らず。数年毎に検査入院反復。1987年肝腫瘍として抗生剤、アルベンダゾール投与で病巣縮小。1990年肝生検で多包虫症と確診。その頃から脾腫出現、肝硬変、食道静脈瘤。1999年11月肝不全にて死亡。	133 135	1999 2000
53	女	36	14	神奈川県相模原市	主婦	北海道	根室市生まれ。22歳まで居住。幼少期よりイヌ飼育。昭和54年末より心窩部膨満感。55年半ばより全身倦怠感、食欲不振、黄疸にて肝癌疑で入院。肝腫大。軽度腹水。肝右葉は大肝腫瘍。外胆汁瘻造設、組織所見から多包虫症。エヒコックス症(肝、肺中葉、肝門、脾頭リンパ節)。肺鬱血水腫+気管支肺炎、腎盂腎炎、胆汁性嘔吐、黄疸、腹水、全身衰弱、呼吸不全で56年8月死亡。	76 80 84 88 96	1980 1981 1981 1982 1984
54	男	41	14	神奈川県足柄下郡箱根町	小学教員	北海道	18歳まで根室市居住。後、山梨を経て現住地。昭和53年7月、胆石症疑で手術したが結石はなかった。昭和54年入院、肝腫大。肝右葉切除。組織所見から多包虫症。	79	1981
55	女	50	14	神奈川県	主婦	北海道	北海道出身、酪農従事者だった。全身倦怠、心窩部痛で入院。開腹し、肝多包虫症と判明。	96 98	1984 1984
56	男	36 ↓ 48	15	新潟県	農業	北海道	16年前、北海道厚岸郡で酪農研修。昭和61年心窩部痛で発病。X線CTで肝右葉-左葉にわたる多房性病変。開腹するも切除不能。ドレナージ(115) 1999年6月多発性肝腫瘍、両肺にも多発性病変、黄疸、傾眠。9月肝不全、DICで死亡(134、135)	115 134 135	1987 1999 2000
57	男	34	15	新潟県	農業	海外	戦時、千島(44-45)、戦後ハリ7(45-47)抑留。昭和27年末頃から上腹部圧迫感、季肋部痛。全身倦怠感。肝生検で診断確定。術後経過不明。	7	1954
58	男	30 ↓ 41	15	新潟県	警察官	海外	戦時、千島(43-45)、戦後ハリ7(45-46)抑留。47年マリア様発熱。50年右季肋部痛。発熱。肝腫大あり。54年入院、試験開腹、肝表面に大小の腫瘍多数。検査片の病理組織所見より肝多包虫症。左腎寄生も推定。昭和36年復職後、高熱、右季肋部痛再発、37年6月入院。肝腫瘍。腹水、自宅療養後、39年8月死亡(41歳)。血清補体結合反応強陽性	10 30	1955 1965
59	男	47	15	新潟県	会社員	海外	戦時中、千島駐屯。40歳時から右季肋部腫脹。肝寄生例。肝重量5500g。	37 38	1968 1968
60	男	49	15	新潟県	農業	海外	中千島松輪島で兵役(1944-45)。戦後ハリ7抑留(1944-45)。昭和43年末から全身倦怠、黄疸、肝腫大。肝癌疑で入院。試験開腹で肝右葉に大小腫瘍。初め肝癌を疑ったが、再生検で多包虫検出。抗体陽性。嚢胞液排出後死亡。肝・両肺寄生(剖検)	47 49	1970 1970
61	女	56	16	富山県	主婦	北海道	約20年前、数年間、礼文島に居住。胃潰瘍の疑いで開腹手術、肝左葉に小児拳拳大腫瘍、広範切除。組織所見から肝多包虫。	26	1964
62	男	63	16	富山県魚津市	漁業	海外	千島に13年、北見市に2年居住。以後、現住所。1年前から上腹部痛、肝腫大、肝癌を疑い来院。肝生検で混濁液多量排出。組織所見で多包虫。術後7年を経過し、嚢孔形成、肝腫縮小。咳嗽出現。XPで両下肺野に転移巣陰影を認める。70歳。	25 51	1964 1971
63	男	62	16	富山県富山市		海外	戦前・戦中樺太、満州で生活。ワジカ(カパー)を生食していた。戦後、ハリ7抑留(1945-49)。北海道にも短期間。4-5年前、一時的黄疸。自然消退。56年初、黄疸出現、食欲不振、全身倦怠で入院。季肋部圧痛。肝左葉腫大。開腹生検で多包虫。	91 93	1983 1983
64	男	71	17	石川県	漁業	北海道	北海道で漁業に従事していた。肝腫瘍で精査のため入院。生検により多包虫の虫体検出。	120	1990
65	男	64	17	石川県能登郡	漁業	海外	25-55歳の間にカマキヤカ、千島、北海道東部に居住していた。昭和49年頃から肝腫大。昭和57年4月、血清診断で多包虫症と診断。肝右葉全城を占める肝多包虫巣を切除。	90 92 93	1982 1983 1983
66	女	62	18	福井県坂井郡坂井町	農業	原発	福井県以外の居住歴なし。1-2年前から猫を飼っていた。昭和52年初より全身倦怠、肝腫大。8月入院時、肝機能低下、肝ソフで右葉に石灰化。血性腹水、浮腫、嗜眠となり57年1月死亡。剖検で多包虫。	69 72 73	1979 1979 1979
67	男	42	19	山梨県韮崎市	会社員	海外	戦後ハリ7抑留3年。帰国後、山梨県韮崎市在住。家族歴に特記事項なし。半年間の頭蓋内圧亢進、小脳性運動失調、精神症状などで来院。右小脳橋角の肉芽腫摘出('68.1.9)。3ヶ月後死亡、剖検で左側にも同様肉芽腫。包虫を証明(病理)。他臓器に包虫を証明せず。	44	1969
68	女	48	20	長野県	主婦	原発	1) 山梨県に居住経験。外地・北海道の居住歴なし。47歳時から全身倦怠感。発熱、肝腫で入院。開腹生検で多包虫。嚢胞ドレイン。退院。補体結合強陽性。2) 症例7のその後経過記載。	22 30	1963 1965
69	女	64	20	長野県	主婦	原発	右季肋部腫瘍、同圧迫感。昭和30年頃から上腹部膨隆、49年肝腫大、56年入院。手術時、肝右葉は嚢腫で占められ、左葉にも散在。嚢胞切除、ドレナージ。病理組織から多包虫症と診断。	85 89	1981 1982

No	性	年齢	県	居住地	職業	群	生活歴・臨床経過	文献	刊年
70	男	57	23	愛知県	元酪農	北海道	1984年迄根室地方で酪農業。狐狩が趣味。 1988年超音波で肝腫瘍。その後増大。1990年肝右葉切除。	119 121 126	1990 1992
71	男	71	23	愛知県小牧市	元教員	海外	定年後、国内外旅行(道東2回、中国、ソ連、スイス等)。いずれもバックツアー。長年犬飼育歴。家族6名は多包虫抗体陰性。1990年頃から弛張熱、肝腫瘍(CT)。血清反応多包虫陽性。5月末肝左葉、胆嚢切除。術後経過良好。	122 123	1991 1992
72	男	65	23	愛知県海部郡	無職	海外	終戦時、兵役で千島シムス島に約1年間居住。 '89/3右季肋部痛、咳嗽で胸部X Pにて右胸水、散在性石灰化陰影。開胸生検で肺多包虫症、メソソール治療中。	128 129	1995 1996
73	男	31	24	三重県	船員	海外	昭和34年初から全身倦怠、脱力、弛張熱。肝腫大。名大今永外科で試験開腹、肝右葉に膿様病変。 多包虫症組織所見なし。補体結合(-)。メソソールで軽快、退院。	20	1961
74	男	54	26	京都府	国鉄	原発	京都府出身。北海道・東北地方、海外への旅行歴なし。犬・猫長期飼育。長男が動物園飼育係。昭和52年9月、胃癌で胃広範切除。54年初メソソール、再発胃癌で死亡。剖検時、肝右葉に多包虫巣2個(径5cm/1cm)。	74 75	1980 1980
75	男	78	27	大阪市	事務員	北海道	16歳まで淡路島、以後大阪市内居住。兵役、海外渡航歴なし。北海道旅行歴('74、'78)メソソール牧場訪問。 '87/5末発熱、肝腫瘍として肝左葉切除、病理で原因不明。'88/9胸部X Pで結節陰影。肺多包虫症を疑ったが確診なく退院。'90/12開胸生検で肺多包虫症と確診。メソソール治療中、他疾?で死亡。	127	1992
76	女	68	27	大阪市		海外	北朝鮮・平壤生まれ、18歳まで居住。23歳時、腹痛で開腹手術、原因不明。30歳頃から左前胸部痛出現、42歳で心外膜にメソソール指摘され開胸したが除去不能。メソソールで鎮痛。	94	1984
77	男	30	27	大阪府藤井寺市		北海道	18歳まで根室在住。22歳頃から肝腫大。昭和43年初から易疲労、右上腹部圧迫感で入院。肝右葉に腫瘍塊、補体結合抗体強陽性。手術で切除不能、胸腔排出2L、頭節確認。(北大葛西外科)	46	1970
78	男	78	44	大分県東国東郡国見町		海外	戦時中、北海道、千島、満州、シベリアに滞在歴。 昭和57年右側腹部に皮下結節、切除。昭和58年同部に再発。昭和59年切除、組織学的に多包虫症と診断。腹部CTで肝右葉に多発性嚢胞。皮下と肝病巣は接続。メソソールで皮下結節縮小、肝嚢胞に著変なし。 【初め単包虫症として報告、1997年第298回皮膚科学会福岡地方会で多包虫症と修正、本報では千島・シベリア等居住歴から多包虫症説を採用】	103 107 108 114 131	1985 1986 1986 1987 1997
79	女	1.5	47	沖縄県	父漁業	米軍	1歳迄メソソール飼育。近隣に米軍人などが遺棄した野犬が多い。主訴：喘鳴、咳嗽。周産期に異常なし。 生後6月から主訴、発熱。免疫沈降反応でEmと沈降線。メソソール治療で肺陰影減少。単包虫症の可能性(あるいは全く他疾患の可能性)もあり得る?	106	1985

註：1) 県：都道府県番号で表示、2) 群：原発群(流行地への旅行滞在歴なく現住地で感染したと思われる本州居住者)；北海道群(北海道居住滞在歴があり北海道で感染したと思われる者)；海外群(海外の流行地で感染したと思われる者)；米軍(米軍関係者による病原動物持ち込みが疑われる者)；疑問例(多包虫症の病理所見が確認できない者)；不明(感染源の記載がない者)、3) 文献：別表の参考文献集番号を参照のこと

多包性エキノコックス症北海道外症例参考文献 (刊行年順)

2002.11.20 改訂

No	著者	論文	雑誌	巻号	刊年	備考
1	桂島忠良	人體えひのこっくす囊包ニ就テ	日病会誌	16, 286-292	1926	論文
2	桂島忠良	東北地方ニ於ケル狗絛虫囊包ニ就テ	東北医誌	11, 245-285	1928	論文
3	川崎亮一、斉藤幸一	肝癌を思わせた糖衣肝の長期観察例	日消病会誌	50, 22-23	1953	抄録
4	久米井安雄、曾根惇	肝エヒノコックス症の1症例	東北医誌	47, 536-537	1953	論文
5	佐藤光永、小笠原雅、宇野廣治	稀有疾患の3剖検例	日病会誌	42, 326-327	1953	抄録
6	佐藤光永、北島榮太郎	青森に原発した多房性包虫症エヒノコックスについて	医事新報	1536, 3849-3850	1953	論文
7	金島正一、栄房光	肝臓多房性包虫症の1例	新潟医学会誌	68, 265-268	1954	論文
8	川崎亮一、安田莊十郎、大関堯、北島榮太郎	既報糖衣肝様肝エヒノコックス症例の剖検並びにその感染経路に就いて	日消病会誌	51, 386-387	1954	抄録
9	対馬克夫、小杉七朗	肝左葉面全摘出を施した肝多房性包虫症の1剖検例	弘前医	5, 10-11	1954	抄録
10	荒井典弘	多房性肝臓包虫腫の1例	新潟医学会誌	69, 293-295	1955	論文
11	北島榮太郎、高松功	青森県に於ける多房性包虫症	寄生虫誌	4, 134	1955	抄録
12	松谷裕之、佐々木隆夫	肝エヒノコックス症の一症例	岩手医誌	8, 100	1956	抄録
13	宇野広治、窪田英造、三上正俊	30年度津軽地方に於て経験した多房性エキノコックスの2例	寄生虫誌	5, 172-173	1956	抄録
14	安田壯太郎、川崎亮一、大関堯、齋藤幸一、下瀬川薫	多房性肝包虫症の1剖検例と本邦50報告例における文献的考察	臨床消化器	4, 74-78	1956	論文
15	安倍弘昌、小杉七朗、田辺秀治、益川良作、田沢幸夫、対馬克夫、益川康司、藤田孟	青森県に発生した多房性エヒノコックス症の3例	日病会誌	46, 100-108	1957	論文
16	宇野広治	多房性エヒノコックス症の3例並びに角皮のPAS染色による補見	臨床消化器	8, 507-509	1960	論文
17	石井克太郎、田島幸雄、宮川弘彬	肝包虫による巨大肝臓腫瘍例	秋田医師会誌	13, 62-63	1961	抄録
18	石井克太郎、田島幸雄、宮川弘彬	肝包虫による巨大肝臓腫瘍例	臨床消化器	9, 279-281	1961	論文
19	宮川弘彬、石井克太郎、前多豊吉	肝包虫によると診定された巨大肝臓腫瘍	最新医学	16, 2251	1961	抄録
20	太田俊夫、富沢康	肝エヒノコックスと思われる1例について	日赤医学	14, 40	1961	抄録
21	順天堂大学医学部第一外科教室、病理学教室	肝エヒノコックス症と慢性胆嚢炎	外科診療	9, 954-963	1963	抄録
22	木下康民、笹川力、森田俊、山崎雅司、萩原敏三	多房性肝包虫症(エヒノコックス症)の1例	日内会誌	52, 1110-1111	1963	抄録
23	横哲夫、香川謙、渡辺泰、森和男	肝包虫症例についての反省	治療	45, 1684-1692	1963	論文
24	玉井定美、中嶋久裕、浦上輝彦、川崎栄悦、石田喜一	包虫症と思われる二症例	弘前医	14, 705	1963	抄録
25	堀井涉、吉沢潤、村井一郎	肝包虫症の1例(針生検診断)	日内会誌	53, 1208	1964	抄録
26	吉友睦彦、深谷桂一	肝包虫腫瘍の1例	日外会誌	65, 98	1964	抄録
27	早川光久、佐藤光	青森県における包虫症	寄生虫誌	14, 676	1965	抄録
28	早川光久、鈴木竹一	包虫症と思われる1例	北獣会誌	9, 32-33	1965	抄録
29	片山勲、菊地敏一	巨大肝臓癌を併発した肝包虫症の1例	臨外	20, 1215-1217	1965	論文
30	木下康民、笹川力、福地勝郎、田代成元、森田俊、伊藤文弥、唐沢吉三郎、野沢幸男、山崎雅司	多房性肝包虫症(エヒノコックス症)の2例	肝臓	6, 309-313	1965	論文
31	泉周雄、渡辺正幸	脳包虫症の1例	臨神経	6, 546	1966	抄録
32	佐藤勝夫、遠藤英一、阿部新平	肝エヒノコックスの一治験例	福島医誌	16, 481-482	1966	抄録
33	佐藤勝夫、遠藤英一、阿部新平	肝エヒノコックスの一治験例	日消病会誌	63, 711	1966	抄録
34	泉周雄、渡辺正幸	脳包虫症の1例	外科診療	9, 735-738	1967	論文
35	上田英雄、高瀬修、広田喜代市、上田英夫、武田忠直、原田尚、亀田治男	肝エヒノコックス症の1例	日消病会誌	64, 1267-1268	1967	抄録
36	柿崎善明、小原徹也、岡本勝博、福士裕雄、石渡淳一	多房性肝包虫症(Echinococcosis)の1例	秋田医師会誌	20, 150-154	1968	論文
37	中島健、西川重光、後藤省三、中原健児	多房性包虫症の一例	新潟医学会誌	16, 65-66	1968	抄録
38	新潟医学会第53回臨床病理検討会CPC記録	長期に亘り肝腫脹を訴えた1例	新潟医学会誌	82, 419-424	1968	記録
39	関野英二、加藤紀夫	肝包虫症の外科的治療(われわれの症例を中心として)	寄生虫誌	17, 639-640	1968	抄録
40	小原徹也、柿崎善明	肝エヒノコックス症と思われる1例	寄生虫誌	17, 640-641	1968	抄録
41	上野和之、小池盛雄、岡辺治男	Echinococcosis multilocularis(多房性包虫症)の1剖検例	医のあゆみ	65, 443-444	1968	抄録
42	関野英二、加藤紀夫	青森県に於けるエヒノコックス症	日消病会誌	66, 173	1969	抄録
43	白坂祥三、拓殖光夫、清野義郎、山口保、高谷彦一郎	7年7ヶ月に亘って経過を観察し得た肝包虫症の1剖検例	青森県病誌	14, 508-512	1969	論文
44	ウイ・キムシン、土田富徳、斉藤勇、喜多村孝一	Cerebral Echinococcosis	臨神経	9, 41	1969	抄録
45	加藤紀夫、八木橋洋志、関野英二	多房性肝包虫症に対する外科的治療の経験	外科治療	23, 477-481	1970	論文
46	満谷夏樹、須川幸彦	多房性肝包虫症の1例	日内会誌	59, 158-159	1970	抄録
47	鈴木正司	肝包虫症の一例	中通病医報	11, 440-451	1970	論文

No	著者	論文	雑誌	巻号	刊年	備考
48	渡部義一、藤宮松太郎、木村元	肝Echinococcus症の1例	日内会誌	59, 547-548	1970	抄録
49	渡部義一	多房性包虫症の1例—新潟地方報告4症例の文献的考察	新潟がんセンター病医誌	9, 237-242	1970	論文
50	千葉勲、遠藤一平、白根東久二、清水輝生、柏村勝利、桑田雪雄、高橋真二、高山和夫	包虫症の一剖検例	日消病会誌	68, 56-57	1971	抄録
51	堀井涉	肝・肺包虫の一例	日内会誌	60, 52	1971	抄録
52	柏村勝利、千葉勲、白根東久二、桑田雪雄、高橋真二、高山和夫	包虫症の1剖検例	寄生虫誌	20, 2補, 57	1971	抄録
53	小松良彦、鹿野真勝、富田重照、佐藤東	巨大肝血管腫とエヒノコックス症の2症例	核医学	8, 282	1971	抄録
54	関野壯、鈴木輝彦、野田茂寿、吉村隆、佐藤幹二	多房性肝包虫症の1例	日内会誌	60, 645-646	1971	抄録
55	白坂祥三、清野義郎、花田雅暉、高谷彦一郎	約8年間観察し得た肝包虫症の1例について	弘前医	22, 126-127	1971	抄録
56	鈴木正司、今井秀夫、五条永四郎	肝生検で診断し得た肝包虫症の1例	日消病会誌	68, 229	1971	抄録
57	高山和夫、西尾泰徳、岡田行生、桑田雪雄、白根東久二	肝癌を疑われた包虫症の1剖検例	日病会誌	60, 178-179	1971	抄録
58	加賀谷常英、霜島克彦、佐藤邦夫、小野寺久勝、杉山尚文、伊藤進、佐藤俊一、海藤勇、伊藤晃、桂佐元	多房性肝包虫症の1例	日内会誌	61, 816-817	1972	抄録
59	大戸仙太郎、土田正義、杉田篤生、石崎允、高橋徹、綿貫勲、吉村裕之	原発性腎多包虫症の1例	寄生虫誌	23補2, 72	1974	抄録
60	高橋徹、綿貫勲、吉村裕之	腎多包虫症の1例	臨泌	28, 419-423	1974	論文
61	中村達、豊田元、杉浦芳章、都築俊治、阿部令彦	巨大な肝包虫症の1例	日臨外医会誌	35, 585	1974	抄録
62	中村達、豊田元、杉浦芳章、都築俊治、阿部令彦	巨大な肝包虫症の1例	日臨外医会誌	36, 451-452	1975	抄録
63	斎藤清子、鈴木伸男、斎藤博、伊藤健一郎	多房性肝包虫症の一剖検例	山形県医会誌	282, 20-23	1975	論文
64	桜井豊、平沢豊、橋本仁、岡正行、今井大、須貝吉樹、星野英二、照喜名重一、舟生俊夫、阿部新平、佐藤勝夫	術後8年目に肺転移をきたした肝エヒノコックス症の1例	日消病会誌	72, 901	1975	抄録
65	東北大学医学部付属病院病理部	325(75)、仙台市、女、66歳、主婦。エヒノコックス症(肝、左腎、脾)、腹部大動脈破裂、黄疸、他	病理剖検輯報	18, 39	1975	輯報
66	千葉県がんセンター研究所病理部	247、君津市、男、47歳、動物商。包虫症疑(左前頭葉、左側頭葉、大脳脚、橋)、肝病巣記載なし	病理剖検輯報	19, 524	1976	輯報
67	瀧上道子、吉峰愛子	エヒノコックス症患者に於ける長期間の臨床検査成績に関する検討	衛検	27, 353	1978	抄録
68	松本一仁、下山則彦、佐藤浩一	青森県に発生した多房性肝包虫症の1剖検例	弘前医	31, 368-369	1979	抄録
69	中屋昭次郎、関敬信、米田正夫、柳碩也、清水博志、高山茂、三浦将司、安念有声、吉村裕之、近藤力王	肝多包虫症の1例	日消病会誌	76, 2127	1979	抄録
70	小宅映士、熊田博光、吉場朝、筑紫清太郎、宮園洗、小池盛雄	cholangiomaとの鑑別が困難であった肝エヒノコックス症の1例	肝臓	20, 756	1979	抄録
71	及川慶一、海藤勇、佐藤俊一、千葉勲、中沢一臣、島山昇	肝包虫症の2例	肝臓	20, 756-757	1979	抄録
72	吉村裕之、近藤力王、赤尾信明、中屋昭次郎	福井県でみられた肝多包虫症の1例	寄生虫誌	28, 60-61	1979	抄録
73	Yoshimura H, Kondo K, Akao N, Ohnishi Y	Case report of Echinococcus multilocularis infection from the mid-western province of Japan.	Int J Zoon	6, 111-114	1979	論文
74	神部誠一、登田耕一、小林正夫	胃癌症例に偶然発見された肝エキノコックス嚢胞	交通医学	63, 159	1980	抄録
75	小林正夫、小山邦彦、赤荻照章、山口希、木本邦彦、池内秀夫、神部誠一、菅池昌、赤坂裕三、川井啓市	肝エヒノコックスの1剖検例	日内会誌	69, 1149	1980	抄録
76	前山史郎、葛西登、重福隆俊、岡部和彦、福田謙、出月康夫、打越敏之	多包性肝包虫症(エヒノコックス症)の1例	聖マリアンナ医大誌	8, 388-394	1980	論文
77	東北大学医学部付属病院病理部	303(80)、仙台市、男、68歳。多房性包虫症(肝、脾、後腹膜、脊椎、左肺、後縦隔、脳幹)、肺膿瘍、他	病理剖検輯報	23, 45	1980	輯報
78	東京慈恵会医科大学病院病理部	12693、大田区、女、36歳。肝多包虫症(10×10×12cmの嚢痕形成、原頭節あり、中央に128×6×4cmの壊死性空洞形成)、閉塞性黄疸、他	病理剖検輯報	23, 209	1980	輯報
79	稲葉允、岩村健一郎	総肝管狭窄を伴い黄疸が反復した肝多房性包虫症の1例	日内会誌	70, 776-777	1981	抄録
80	前山史郎、葛西登、岡部和彦、福田謙、出月康夫、打越敏之	多包性肝包虫症の1例	日消病会誌	78, 2058-2059	1981	抄録
81	幸島仁、石沢和敬、月江英一、龜田治男、井出哲也、仲吉昭夫、小林昭夫	肝エキノコックス症の1例	日消病会誌	78, 2059	1981	抄録
82	松本一仁、下山則彦、佐藤浩一	青森県に発生した多房性肝包虫症の1剖検例	最新医学	36, 371-377	1981	論文
83	東京慈恵会医科大学病院病理部	12759、渋谷区、男、56歳。肝包虫症(肝左葉に嚢痕形成、原頭節散見、後腹膜にも)、閉塞性黄疸、肝纖維症、急性脾炎、肺炎、他	病理剖検輯報	24, 209	1981	輯報
84	聖マリアンナ医科大学病院病理部	A81-96、相模原市、女、37歳、主婦。エキノコックス症(肝4.030g、肺中葉、肝門及び脾頭リンパ節)、肺嚢腫+気管支肺炎、他	病理剖検輯報	24, 262	1981	輯報
85	柳沢昭吾、土屋嘉昭、大井悦弥、船崎善三郎、井出宏	長野県における肝多房性包虫症の1例	日農村医会誌	30, 634-635	1981	抄録

No	著者	論文	雑誌	巻号	刊年	備考
86	遠藤尚陽、佐々木信男、小林力、北純、熊谷純	脊髄にも病巣をつくっていたエヒノコックスの1例	東北震災紀要	25, 113	1982	抄録
87	Honma K, Sasano N, Andoh N, Iwai K	Hepatic alveolar echinococcosis invading pancreas, vertebrae, and spinal cord.	Hum Pathology	13, 944-946	1982	論文
88	細井由美、品川俊人、神田鎮蔵	神奈川県でみられた多包虫症の1例	寄生虫誌	31増, 97	1982	抄録
89	大井悦弥、土屋嘉昭、柳沢昭吾、船橋善三郎	エヒノコックスによる巨大肝嚢胞の1例	信州医誌	30, 540	1982	抄録
90	吉川淳、木村政徳、角谷真澄、広瀬仁一郎、上村良一、高島力、岡井高	肝エヒノコックス症の1例	日本医放会誌	42, 1215-1216	1982	抄録
91	上村良一、高島力、辻政彦、黒田吉隆、鈴木国功	閉塞性黄疸にて発症した肝包虫症の1例	画像診断	3, 271-275	1983	論文
92	岡井高、森本日出雄、森岡健、若月寿之助、松木伸夫、片山外一、山岸満、永川宅和、登谷大修、田中延善、加登康洋、小林健一、角谷真澄、赤尾信明、車谷宏、熊谷満	腹部超音波検査が診断の契機となった多房性肝エヒノコックス症の1切除例	日消病会誌	80, 1561	1983	抄録
93	吉村裕之、近藤力王至、赤尾信明、中屋昭次郎	肝多包虫症の2例	寄生虫誌	32補2, 75	1983	抄録
94	相澤利武、小池正男、岩井和夫、渡辺仁吉、佐藤哲朗、佐藤光三	胸椎包虫症の1例	東北震災紀要	27, 367-368	1984	抄録
95	赤井裕輝、小林和夫、大槻昌夫、鈴木勲志、成井貴、菅原啓、太田恵、平田徹、小野寺博義、及川正道、後藤由夫、鮎沢賢次郎	千島にて感染したと考えられる肝エヒノコックス症の1例	日消病会誌	81, 143	1984	抄録
96	福西康夫、福井祥二、葛西登、加藤行雄、重福隆俊、藤井守、前山史郎、岡部和彦、出月康夫、打越敏之	多包性肝包虫症の2例	肝臓	25, 1073	1984	抄録
97	奥田剛久、鈴木純二、立川茂樹、藤森賢	エヒノコックス症患者の疼痛管理	麻酔	33, 673	1984	抄録
98	佐藤泰治、猪狩次郎、窪田俊、出月康夫、渡辺弘、加藤行雄、岩渕省吾、岡部和彦、細井由美、柚木幸男	肝エヒノコックス症の1例	日消病会誌	81, 345	1984	抄録
99	近藤博満、須藤俊之、大川正臣、佐々木大輔、吉田豊、山口富雄	肝cyst adenomaとの鑑別が困難であった肝多包虫症の1例	日超音波医学会研究発表会論文集	48-48	1984	抄録
100	相澤利武、佐藤光三、小池正男、岩井和夫、渡辺仁吉、佐藤哲朗、若松英吉	胸椎包虫症の1例	臨整外	20, 1345-1348	1985	論文
101	弘前大学医学部病理学教室	5152、南津軽郡、女、71歳、農業。肝多包虫症（術後、肝門部）、食道静脈瘤破裂、肝線維症、閉塞性黄疸、腹水950ml	病理剖検報	28, 17	1985	報
102	高橋昭博、山口富雄、稲葉孝志	青森県下で原発した多包虫症の1例、ならびに本州における本症の文献的考察	寄生虫誌	34, 増, 86	1985	抄録
103	石井洋一、藤野隆博、兼松隆之、今山修平、宮岡達也、坂本司	皮膚腫瘍を主訴とした包虫症例	寄生虫誌	34, 増, 86	1985	抄録
104	高橋昭博、山口富雄、稲葉孝志、桜田淑子	临床上、単包虫症と考えられた多包虫症の1例	寄生虫誌	34, 2補, 85	1985	抄録
105	高橋昭博、山口富雄、稲葉孝志、林博昭	青森県で原発した多包虫症の1例	寄生虫誌	34, 509-512	1985	論文
106	高良吉広、佐藤良也	乳児肺包虫症と思われる1例	日小児会誌	89, 216-222	1985	論文
107	入来教、今山修平、宮岡達也、占部治邦	包虫症	西日皮膚	48, 9-12	1986	論文
108	Ishii Y, Fujino T, Weerasooriya MV, Kanematsu T, Imayama S, Miyaoka T, Sakamoto T	Subcutaneous echinococcosis: a case report from Kyushu.	Jpn J Parasitology	35, 269-272	1986	論文
109	石黒昌生、高橋賢郎、近藤博満、樋口茂樹、佐々木大輔、吉田豊、大川正臣、佐々木隆男、山口富雄	Circulating anticoagulant を認め、血漿交換後に肝切しえた肝包虫症の1例	肝臓	26, 963	1986	抄録
110	工藤一、福士明、成田竹雄、吉村敦皓	食道静脈瘤破裂をきたした多包虫症の1剖検例	日病会誌	75, 417-418	1986	抄録
111	清水正宏、丸岡伸、中村護	肝および骨病変を認めたエヒノコックス症の1例	核医学	23, 1501	1986	抄録
112	高橋昭博、山口富雄、稲葉孝志、工藤一、小原正和、樽内正典	術後30年を経過して死亡した多包虫症の1例	最新医学	41, 2876-2883	1986	論文
113	東京大学病院中央検査部病理検査室	2421、東京都、男、61歳、建築会社。肺癌（転移あり）、糖尿病、肝エヒノコックス症（3×1.5cm線維性嚢胞2個、原頭節確認）	病理剖検報	29, 149	1986	報
114	入来教、今山修平、宮岡達也、占部治邦	エヒノコックス症	皮膚病診療	9, 521-524	1987	論文
115	興邦建郎、小林貞雄、井上雄一郎	多房性包虫症（Echinococcosis）の1例	新潟医学会誌	101, 599	1987	抄録
116	前山史郎、吉田由香、森山直哉、土屋貴聖、福西康夫、葛西登、岡田仁史、須階二朗、加藤行雄、岡部和彦、猪狩次郎、福田護、窪田俊、出月康夫、渡辺弘、品川俊人、打越敏之	対照的な臨床経過をたどった多包性肝包虫症の2例	神奈川医学会誌	15, 22-29	1988	論文
117	鳴海俊治、百田行雄、松田恵司、伊藤恭雄、成田竹雄	多包虫症の1例	日消病会誌	85, 143	1988	
118	山口富雄、高橋昭博、稲葉孝志、桜田淑子	青森県でみられた肝多包虫症の2例	寄生虫誌	37, 82	1988	抄録
119	小林美砂子、堀映子、安藤啓一、木谷優、渡山淳子、水谷弘和、大場寛	肝多包虫症の一例	日本医放会誌	50, 1635	1990	抄録
120	亀井哲也、二谷立介、古本尚文、渡辺直人、征矢敏雄、瀬戸光、柿下正雄	肝腫瘍との鑑別が困難であった肝エヒノコックス症の1例	日本医放会誌	50, 1635	1990	抄録
121	久納康嗣、折戸悦朗、野尻修、平嶋昇、岡野美紀、藤井一彦、溝上雅史、島島信利、山本正彦	肝エヒノコックス症の一例	日消病会誌	88臨増989	1991	抄録
122	横山功、横山泰久、中塩達明、水田正雄、菊池学、横山秀吉	多包性肝エヒノコックス症（多包性肝包虫症）の一例	現代医	38, 493-498	1991	論文

No	著者	論文	雑誌	巻号	刊年	備考
123	横山功、中塩達明、菊池学、水田正雄、横山泰久	肝エキノコックス症（肝多包虫症）の一例	日消病会誌	89, 臨増, 1047	1992	抄録
124	豊木嘉一、林健一、吉原秀一、遠藤正章、佐々木睦男、小野慶一、須藤俊之、佐々木大輔	肝包虫症の3例	日消病会誌	89, 臨増, 1047	1992	抄録
125	稲葉孝志、神谷晴夫、石田邦夫、佐々木大輔、佐々木睦男、方山揚誠	青森県でみつかった2例の多包虫症、本州への本症伝播の可能性を考察して	寄生虫誌	41, 補, 81	1992	抄録
126	小林美砂子、水谷弘和、水谷優、鈴木啓史、大場寛、佐藤重房、柴田健雄、折戸悦朗、花井拓美、由良二郎	特徴的なMRI像を示した肝多包虫症の1例	画像診断	12, 468-472	1992	論文
127	西岡安弘、北田修、谷向健、白藜夏生、来栖昌朗、末永直人、中村仁、杉田表	関西地方で経験した多房性肺包虫症の1例	日胸疾患会誌	30, 898-902	1992	論文
128	国枝武文、佐藤英文、三島信彦	多発性結節陰影を呈した肺エキノコックス症の一例	日農村医会誌	44, 458	1995	抄録
129	国枝武文、佐藤英文、三島信彦	多発性結節陰影を呈した肺エキノコックス症の一例	日農村医会誌	45, 99-103	1996	論文
130	和田仁、高橋昭喜、日向野修一、富永操二、坂本澄彦	脳腫瘍との鑑別に苦慮した脳多包虫症-CT・MRI imaging 所見を中心に	日本医放会誌	56, 608-609	1996	論文
131	板倉英潤、永江祥之介、堀嘉昭、矢永勝彦、杉町圭蔵	皮膚に再発を認めた包虫症の1例	西日皮膚	59, 305	1997	抄録
132	渡辺泰宏、宮沢淳一、坂本十一、石黒陽、守屋法子、須藤晃司、須藤俊之、吉田豊	類似の形態を呈した後腹膜腫瘍と肝多包虫症の比較	超音波医学	24, 61	1997	抄録
133	日本大学医学部板橋病院病理部	10032、板橋区、男、47歳、内装業。肝エキノコックス症。肝膿瘍、肝内結石症、右肺気管支肺炎	病理剖検輯報	42, 80	1999	輯報
134	新潟大学医学部病理学第二講座	99-72、北蒲原郡、男、48歳、瓦職人。エキノコックス症。DIC、脾腫(570g)、胃食道静脈瘤、腹水300ml、黄疸性腎症(250/230g)	病理剖検輯報	42, 180	1999	輯報
135	長谷川剛、内藤真	エキノコックス症の剖検例	日病会誌	89, 345	2000	抄録
136	大荷澄江、生沼利倫、林紀乃、岩佐敏、今井光二、楠美喜晃、根本則道	16年間の経過で、肝不全にて死亡したエキノコックス症の剖検例	臨床病理	48総会号:287	2000	抄録
137	宗村美和、岡部健二、高橋克朗、神谷晴夫	山形県原発と考えられる肝エキノコックス症例	第160回日本内科学会東北地方会々誌	12, 41	2000	演題
138	木村憲央、村田希吉、須貝道博、榎方博文、袴田健二、神谷晴夫	肝エキノコックスの1例	第13回東北小児肝胆膵研究会抄録集	5	2002	抄録
R1	山口富雄、中出幸克、高田伸弘	東北地方における包虫症の研究(1)	寄生虫誌	17, 337-338	1968	抄録
R2	高橋昭博、山口富雄、稲葉孝志、林博昭	本州における多包虫症の文献的考察	寄生虫誌	35, 95-107	1986	総説
R3	山口富雄	エキノコックス症	感染症	16, 99-104	1986	総説
R4	山口富雄	エキノコックス症	臨と微生物	23, 185-191	1996	総説
R5	小笠原和宏、内野純一、中川隆公、津田一郎、小川秀彰、佐藤直樹	肝エキノコックス症の病態と予防-特に職業との関連において	日職災医会誌	48臨増:136	2000	抄録
R6	土井隆雄、神田栄次、二瓶直子、内田明彦	北海道外における多包虫症発生の実態と今後の対策への提言	日本公衛誌	47, 111-126	2000	総説

註：文献番号は別表「北海道外の多包虫症例」の文献番号と一致



No	性	年齢	職業	県	居住地	群	生活歴・臨床経過	文献	著者	刊年
1	男	44	士族/文学	43	熊本県菊池郡	?	【肺臓単包虫症】 時に山で猪・鹿など捕らえ食す。生来健康、著患を知らず。1871年(明治4)頃から左季肋下に楕円形腫瘍、次第に増大、圧迫感あるも疼痛なし。1876年秋、腫瘍部に激痛を覚えた後、翌朝、腫瘍消失、腹部全体に疼痛、膨満感、吐気があったが漸減。10日後に梅毒大の腫瘍。3月17日来診。左季肋下、乳線より外側に小拳大の腫瘍。呼吸によって上下。脾臓と連続していると思われた。探針で穿刺すると無色透明漿液、蛋白質(-)、食塩(+)。鏡検で鉤検出、包虫症と診断した。	1	熊本医学校1級生某	1881
2	女	35	農業	44	大分県大分郡	?	【肝単包虫症】 健康、著患を知らず。其父は狩猟家だが、患者は獣肉を食さず。1875年(明治7)女児出産後、心窩部に腫瘍。圧迫感(+),徐々に増大。近医に診せたが不明。1879年女児出産後、腫瘍増大。直径9寸2分、殆ど腹部全体を満たす感じ、横隔膜を圧迫しやや呼吸促迫。打診上、肝臓と腫瘍は連続、波動(+)。探針で穿刺、濃厚米汁様膿液5-6合排出。ソンドで探ると、更に膿液を排出、中に豌豆〜胡桃大の囊胞数個。腫瘍縮小。以後、4-5月放置により腫瘍再度増大。切開し、ゴキ管挿入し排膿。悪臭著明、200倍石炭酸水で洗浄。発熱解熱を反復したが、徐々に回復、痼疾を残り治療。	2	志村玄洋 志村玄洋	1882
3	女	25	農業	44	大分県大分郡	?	【肝単包虫症】 4-5年前、梅毒罹患、月経不順を残し治療。他に著患なし。妊娠歴なし。1870年春、受診時に腹部腫瘍を指摘され、次第に増大し肋骨を圧迫するに至った。触打診により右季肋部から心窩部にかけて草蓐のような硬結をみたが、呼吸促迫や消化器症状はない。穿刺すると、蛋白を含みぬ透明液を吸引し、包虫症と診断し切開以外に治療法がないことを告げ、健胃剤を与えて帰した。	3	志村玄洋	1882
4	男	51	門番車夫	23	愛知県尾張国		【右股関節単包虫症】 30年来東京で門番、車夫などをし、現在は魚具商。生来健康、1882年腸チフスに罹患したが3ヶ月で治癒。1883年10月、右股関節に軽度腫脹、疼痛あり、とくに歩行時に増強したが放置。1886年10月から右大腿上方に腫脹あり疼痛のため歩行困難。某医を受診したが却って悪化し、3月に至り入院した。右大腿上1/3が腫脹、圧痛、大腿の運動が疼痛増強。4/27腫瘍切開、約2,000gの膿汁排出。その後発熱、最高39.5℃。6/2再切開、約1,500ccの膿汁流失、白色大小の娘胞排出、包虫と診断した。術後衰弱死。剖検：梅毒性変化合併。	4 5 6	高島挺三 高島挺三 大澤岳太郎	1887
5	女	59	主婦	38	愛媛県伊予国温泉郡		【肝単包虫症】 平素健康、著患なし。1昨年7月、上腹部小腫瘍を触知、次第に増大。昨年11月腫瘍部に激痛、嘔吐、悪寒戦慄あり。12/5初診、上腹部に13×12cmの波動ある腫瘍、肝濁音と連続。穿刺により黄色半透明液。12/8再穿刺、黄色半透明液約1ℓ。腫瘍は縮小したが、本年1/2再度腫大。再び穿刺したところ約1ℓの膿汁排出、その中に卵白色の膜片あり、また鏡検により小鉤数個を発見し、エキノコックスと診断。患者に犬は飼っていないが、村内に犬多く、共用井戸からの感染か。	7	毛利文啓	1888
6	男	31	靴工	27	大阪府西成郡	?	【肝単包虫症】 生来、強壯ではなく、酒好き。15-6歳頃から腹痛あり、時に白色扁平な虫を便に排出。20歳頃から胃弱症で時々健胃剤を服用。犬毛を用いたケット製造等をしてきたが、23歳で上京、靴工となり、1888年帰阪。6年前から右季肋部が膨隆し時に鈍痛を覚えたが放置。昨年、某医で患部穿刺、透明液約1升排出、直後に嘔吐・下痢があったが、患部は扁平になった。その後再度膨隆し、昨年4月末発熱、嘔吐、下痢を反復、5月5日某医で患部穿刺、赤褐色混濁液570、8月2400、12月2100、19日600ccを得た。5月28日初診、穿刺で3,640ccの汚濁色混濁液。灰白色沈殿が全液量の5分1、胆汁性反応なく、鏡検で小鉤を発見、包虫症と診断した。その後圧迫帯を施し、6月下旬になっても患部膨大せず退院。約半年後、本年2月16日来院したが健康そうで、患部はやや膨隆しているが打聴診で異常なく、治癒と思われた。	8	神戸文哉	1889
7	女	32	主婦	-	-		【肝単包虫症】 幼時虚弱、23歳で結婚。18歳頃から飲酒毎日5合〜1升。1879〜82年、竹林狗2頭を飼育。5、6年前より左胸部下方隆起、2、3年前から呼吸困難、心悸亢進あり。腫瘍は波動あり。穿刺により透明液、食塩に富み蛋白質を欠く。肝臓包虫症と診断し、手術(シモン氏法)により粘滑寒天様物質排出、数日後腫瘍に変化、年余を経て全治。	9	伊藤三三	1890
8	男	21	農業	38	愛媛県久米郡小野村		【肝脾腫膜単包虫症】 1889年4月、上腹部に核蜜柑大腫瘍、苦痛なく放置、次第に増大し呼吸促迫を感じ受診(1891/6)。膈の上下に橙大の腫瘍が左右2個ずつ計4個並んでいた。穿刺で無色透明液、食塩と琥珀酸反応著明、蛋白質(-)。多発性包虫は手術が危険と説き帰せさせた。6ヶ月後再度来院。右季肋部腫瘍切開、大小50個余の娘胞と液体約1,000g排出。季肋部腫瘍は消失したが、肋間の疼痛、呼吸困難は消滅せず、打診上濁音界拡大傾向あり、肋間を穿刺すると約700gの液体と数個の娘胞排出。一時軽快したが3ヶ月後、衰弱死。	10-12	谷口長雄	1895
9	女	43	-	38	松山市三番町		【肝単包虫症】 生来著患なし。45年前から心窩部圧重感、球形の腫瘍あり次第に増大、食欲不振、嘔吐、腹水、下肢浮腫あり医治を求めるが無効。1893/11初診。心窩部から右に10×8cmの楕円形腫瘍。微波動。穿刺で無色透明液約500g、無数の鉤。以後1年余腫瘍、自覚症状とも消失。	10-12	谷口長雄	1895
10	女	44	-	38	愛媛県新居郡西条大町		【肝単包虫症】 生来健康。20歳頃から腹部に小腫瘍、他に症状なく放置。漸次増大、最近5、6年は一層増大、倦怠感、胃部圧重感あるも胃治効無く、1889/11初診。栄養不良、心窩部以下に巨大腫瘍。切開で多量の液体と大小娘胞。中途退院し、転帰不明。	10-12	谷口長雄	1895
11	男	54	-	38	松山市北京町		【腎臓単包虫症】 生来健康、著患無し。7、8年前から左腎部に微痛。3、4年前から同部に拳大腫瘍、増大し倦怠感、羸瘦、心悸亢進、下肢浮腫。1893/8初診。左腹部に小児頭大腫瘍、波動あり、穿刺で2000余の乳白様液排出、娘胞断片+鉤を検出した。以後、一時軽快したが、再発。6ヶ月後、数回穿刺したが、化膿し、鉤血症死。	10-12	谷口長雄	1895
12	男	29	-	38	愛媛県西宇和郡		【肝単包虫症】 生来健康。幼時犬を愛玩、4年前まで犬、牛馬、猫飼育。18歳頃、角力で右季肋部打撲、鵝卵大腫瘍を生じ、呼吸時疼痛あり、以後腫瘍残存。3年前から右季肋部、心窩部その他漸次膨満、過労時に鈍痛あるも、安静時は異常なし。右上腹部大腫瘍は、皮膚着着なく、弾性硬、波動あり、呼吸で上下。右肋骨窩にも数個の腫瘍。穿刺により透明液、食塩多量、蛋白質強(-)、鉤・頭節あり。6/5第一次手術、開腹し腫瘍に腹膜を癒着させ、6/19腫瘍切開、大小娘胞を掻爬、硼酸水洗浄、ガーゼ挿入。腫瘍は縮小したが不完全。再度来院を約し帰郷。右肋骨窩腫瘍は再来を期し、放置。	13	澤辺保雄 西村貞三郎	1897
13	男	35	囚人	44	大分県大野郡小野市		【胸壁肺単包虫症】 22歳時麻疹罹患。1897年7月来咳痰、咯痰、発熱。11/9肺結核にて死亡。剖検。左胸腔、第9-11肋間に楕円形腫瘍。中から多数の白色娘胞。11胸椎にも同着胞。内容は透明液、鏡検にて原頭節(+)	14	田中民夫	1898
14	男	51	外航船員	14	横浜市松影町生		【肝単包虫症肺穿孔】 生来健康、11年前右胸膜炎、1895年日清戦争従軍。汽船船員としてウツノワツカ、釜山、上海近海など東亞諸国航行。滞。動物飼育歴なし。1898/3中旬発熱、咳嗽、呼吸促迫、食欲不振、腹部苦悶。7/23右背下部に小腫瘍出現、圧迫により遺尿、微痛。右側胸部穿刺により黄色膿液。右季肋下に拳大腫瘍。波動あり、穿刺により膿液。8/31手術。腫瘍内容掻爬。9/12咳痰量増加、赤褐色、腐卵臭あり。9/26咳痰中に黄色膜片排出、漸次衰弱。10/3死亡。剖検(京都医学校)。原発性肝包虫、膀胱直腸腸包虫。右穿孔性膿疽性肺炎・肋膜炎。左肺水腫。腰部・後腹膜膿瘍。	15	角田隆 浅山協太郎	1898
15	女	48	農婦	45	宮崎県加久藤村		【肝単包虫症】 生来強壯ではないが麻疹以外に特疾なし。3男4女の母。1893/8腹部膨満を自覚、他症状なく放置。次第に増大し右季肋部に硬結、同年11月臨月近似的腹部膨満を呈し、呼吸促迫、腹部重圧感あり医治により好転せず放置した所、腹部膨満減少、硬結も半ば消失。98/6初、突然胃痛発作、発作収束後も胃痛持続し来院(98/9/5)。右肺下葉上、右季肋部に2横指の硬結、軽度圧痛、波動あり。穿刺により無色透明液、蛋白(-)、食塩・琥珀酸(+)、鏡検で鉤を発見。第1回手術：腹壁を腹膜に癒着させ、第2回手術：囊胞切開、内容液3,700gを排出後、胞壁掻爬、3%硼酸水で洗浄。8日後右腰部に波動、胞壁を破り内容液100余排出。硼酸水洗浄を反復、治療。以後も季肋部硬結は持続するも薬業に従事。	16	赤星弥彦次	1899



No	性	年齢	職業	県	居住地	群	生活歴・臨床経過	文献	著者	刊年
16	女	13	牛肉商	28	神戸市葺合新川		【肝単包虫症】 父母・同胞3健在。飼犬1頭。特疾なし。約1年前から心窩部腫瘍。無痛、他症状なく放置。右季肋下に人頭大腫瘍、圧痛(-)、波動(+)、呼吸に伴い上下。穿刺により無色透明液、糖、蛋白(-)、食塩(+)、鉤(-)。肝包虫症と診断。家族が手術拒絶。転帰不明	17	西村貞三郎 藤本正夫	1901
17	男	35	学生	21	岐阜県美濃郡大垣町		【肝単包虫症】 5、6歳から咳嗽喀痰(白色豌豆大2個位)。7、8年前、飲酒後、異常塊吐出、嗜血、約2週後再度多量嗜血。'03/2初診。鏡検で喀痰中に包虫小鉤(+)。結核菌・ジストマ卵(-)。毎朝、3×0.5cmの膜様片吐出、その後嗜血を反復。幼時、洋犬を愛玩し、同食していたためと思われる。転帰不明	18	林芳輝	1903
18	女	21		43	熊本県上益城郡		【肝単包虫症】 生来著患なし。7、8年前、右季肋部に児拳大腫瘍、他症状なく放置。3年前同部疼痛3ヶ月余あるも消退。昨夏から腫瘍増大。腫瘍は、呼吸により上下、波動(+)。'03/11.20手術：肝右葉の膜様隆部を穿刺、透明液約50g排出、同部切開により大小14個の凝固寒天様囊胞抽出、鏡検で包虫鉤、原頭節検出。術後数日間嘔吐あるも次第に軽快。腹部膿孔を2%硼酸水で洗浄すると、大小囊胞排出。次第に減少し、12/20退院。	19 20	藤井寿松	1904
19	男	30	職工	-	-		【肝・肺包虫症】 '02/1右季肋部疼痛あり。'04日露戦出征、マラリヲ罹患し後送。'06右季肋部痛、嘔吐、黄疸。右季肋部腫瘍を穿刺し、透明液、中に原頭節検出。以後2回、囊胞数個を吐出。既往に犬と接触あり、感染源と思ふ。手術、予後記載無	21	三浦謙之助	1907
20	男	13		27	大阪府		【肝単包虫症】 3年前、学校で季肋部打撲後、局所腫脹、疼痛、発熱、呼吸困難。肝濁音界上部は第5肋骨、季肋下4横指に達し、小児頭大腫瘍あり、抽出を試みたが出血多量で中断。10日後、化膿・発熱のため昇水洗浄。2ヶ月後7ヶ月注後、囊胞膜剥離。その後治療に向かった	22	高安道成	1907
21	女	15	農業	43	熊本県上益城郡朝日村		【腹膜単包虫症】 生来著患無。近隣に犬は多いが、当人は愛玩せず。鳥獸肉は好むが煮焼後に摂取。'06/2上旬、下腹痛発作、疼痛は治癒したが下腹部に鶏卵大腫瘍発見。'07/11初診。右腸骨窩に鶏卵大腫瘍、移動性有、波動?、手術によりこれを摘除。別に小鶏卵大囊胞あり、囊胞壁を破ると豌豆大～空豆大白色囊胞排出、包虫症と考へ、残存囊胞を除去し、手術終了。術後数日、嘔吐、苦悶あるも、11日目発熱、22日目退院。囊胞液は蛋白(-)、食塩・琥珀酸(+)。鏡検で原頭節、鉤検出	23	山崎正薫	1908
22	男	47	第1例	35	山口県阿武郡山田村		【肝単包虫症】 数年前、左季肋部に腫瘍触知、'04年春頃から左上腹部膨満感、時に疼痛。10月硬結を発見し初診。左上腹部に児頭大腫瘍、呼吸時移動。11/19手術：肝葉から下垂する児頭大囊胞と左葉にある小囊胞を発見、化膿液含有。切開し大小の娘胞と内容液を排出、生食で洗浄。術後経過良好。12/14退院。	24	三宅速	1909
23	男	42	第2例	40	福岡市東中洲		【腸間膜単包虫症】 飲酒家、犬を愛玩。22歳激性マラリ、27歳梅毒罹患。発作性耳鳴・頭痛・眩暈。約10年前から心窩部に鶏卵大腫瘍。他症状なく放置。5年前(38歳)腫瘍急速に増大、下腹部緊迫感あるも、後再び縮小。41歳、再度急速に増大、呼吸促迫、圧迫感あり初診(7/3.16)。右腹部膨満、腫瘍は全腹腔に拡大、穿刺液は食塩・琥珀酸(+)、囊胞切開により約9、10cmの内容液排出、大小娘胞多数。術後、創内を生食で洗浄、約1週後腐敗臭、発熱あり、硼酸水で洗浄、約1週で好転、5/18退院。	24	三宅速	1909
24	女	22	第3例	40	福岡市竹若町		【大腿四頭筋単包虫症】 '4年前、右大腿中央部に拳大腫瘍、湿布療法でやや縮小、他症状なく2月放置。'08/1初産、産児は60日後胎死で死亡。その後、発熱、腫瘍児頭大に増大、圧痛無、波動?/6/17手術により抽出(887g)。内に大小多数の娘胞、内容は化膿液。術後経過良好。6/26退院。	24	三宅速	1909
25	男	38	商業	44	大分県北海部郡津組村		【肝包虫症肺穿瘻】 生来特疾なし。1897/8.31頭痛、悪寒、右肩脚部疼痛あり。9/1発熱、頭痛劇烈、40℃に達し、9/6精神錯乱、9/21覚醒。9/25心窩部→右季肋部にかき疼痛あり、季肋下に硬結触知。9/26右半身に疼痛、呼吸困難で失神前。10月末まで1月余、身体動揺時に右胸側・乳房部に疼痛、一方硬結は消失。11/23初診。打診上肝濁音界と肺下界を区別し得ず。腹部やや膨満、季肋下腫瘍触知し得ず。12/3咳嗽煩瑣、咳嗽時右胸痛。12/20咳嗽煩瑣、胡桃大～梅毒大まで多量の膿状物を吐出。十数個の囊胞あり、包虫鉤を検出。琥珀酸(+)。12/24、26、29同一囊胞3-4個吐出。12/30患者帰村。	25	北野栄次郎	1909
26	女	33	農業	46	鹿児島県鹿儿島県		【肝単包虫症肺・腹壁穿孔】 幼時健康、17歳で結婚、19歳で1子。この頃、愛犬が子犬を残して死に、子犬が鳴くので自分の乳を与え同食していた。家族の結核患者を看護し翌年、右胸下部に疼痛、次第に硬結を生じ、疼痛を伴う。発病約12年前。腹部とくに右季肋部膨満、腫瘍、圧痛(+)、波動(+)、鎮痛剤投与していたところ、糞便中に包虫塊2個を排泄、その後強壯剤、水銀軟膏塗擦を続けること約1ヶ月で肝硬結縮小。さらに膈下腹壁穿孔し、葡萄状の包虫塊排出。健康を回復した。	26	久木田盛哉	1909
27	男	36	農業	46	鹿児島県伊佐郡大口村		【肝単包虫症】 幼時健康、10~12歳毎冬腹痛、12歳時より頸部・腋下リンパ節腫脹、屢々穿孔し、24歳時まで腹腫を触知。昨年マラリヲ罹患、約10日で治癒。24歳時(鹿児島造士館学生)熊本へ修学旅行、帰校後約1週間感冒気味で咳嗽、喀痰あり。嗜血したが約1週で止血。以後3年間、毎年1、2回嗜血、1~2週持続。その後8年間嗜血はなかったが、1昨年再発、10日で止血。今回1週間前から大量嗜血、衰弱し、止血し難いため受診。嗜血中に結核菌・ジストマ卵(-)、安静を命じた。早晚、再嗜血の虞あり。肝単包虫症と診断。転帰記載無	27	瀬上弘庵	1909
28	女	22	無職	44	大分県大分町		【肝・肺・両腎・骨盤内単包虫症】 生来虚弱、著患無。動物を厭忌、犬猫飼育なし。8歳時より胃部小硬結触知、無痛、漸次増大。6年前肺炎罹患後、左下腹部に腫瘍、3年前左右季肋部、左腸骨窩にも腫瘍形成、医治奏功せず。腹部は全体に膨満、とくに右季肋部に著明。また臍直下から恥骨上部に達する児頭大腫瘍、表面凹凸有。他に左腸骨窩に楕円形極大の腫瘍を触知。下腹部腫瘍穿刺により無色透明液、琥珀酸(-)、食塩(+)、蛋白質(-)、包虫原頭節(-)。外科手術により大小の囊胞を摘除。転帰記載無	28	田吹 稔	1909
29	男	63		41	佐賀県三養基郡		【肝単包虫症】 生来健康、著患知らず。58歳頃から慢性胃弱、62歳頃頃から肝臓部に圧重感、微痛あり、小腫瘍を触知。初診 10/9.5肝臓やや肥大、右季肋下2横指に半球状隆起、波動(+)、微圧痛(+)。腹水(-)、黄疸(-)、腫瘍穿刺により無色透明液、食塩(+)、琥珀酸(+)、蛋白(-)。開腹し腹膜癒着後、再手術：囊胞穿刺により透明液約300ml、鏡検により原頭節、鉤検出せず。内容を種殖し、稀昇水で洗浄、排膿管を挿入し手術終了。約5週間で創口閉鎖、退院。	29	斎藤信輔	1910
30	男	55	海産業 債権仲買	01	小樽在住/ 大分県大分郡		【肝単包虫症】 15歳出郷、21歳迄大分町、佐賀県3年間、大阪、29歳で大分帰郷、36歳で小樽移住、海産業から債権仲買に転業。飲酒3~4合、喫煙、愛犬家、常に7~8頭を飼育。1886年大分在住時、飲酒後、右季肋部に腫瘍触知。東大Dr.ベルツ、外科・宇野教授受診、腫瘍成熟まで数年待てと言われた。'97/4七飯村で馬車と衝突、失神1時間余。その際、季肋部腫瘍の破裂を感知、腹痛あったが投薬で緩解。翌'98年夏、症状悪化、小樽・原田医師により投薬緩解。その後、胸骨右第4肋間腔皮下に児拳大腫瘍形成、同医師により手術除去。以後十数年腹部不快感を抱えつつ'09/7中旬に及んだ。診察時、腹部全体に膨満、右季肋下から左下腹に及ぶ腫瘍あり、肝に連接せず。'09/9.19手術：開腹下に腫瘍穿刺、約2、200gの内容液排出、胆嚢大娘胞~小指頭大孫胞多数を含む。囊壁極肥し、手術終了。以後2週間数個の娘胞を排出したが、12/13には創口閉鎖、術後86日で退院。	30	関場不二彦	1910
31	男	?	?	?	?		【肝単包虫症】 昨年手術シテ本年再発セル肝臓包虫病患者	31	小山憲佐	1912
32	男	36	陸軍 軍人		台湾総督 府陸軍部		【肝単包虫症】 生来健康、著患を知らず。5年前から台湾総督府陸軍部勤務。愛馬家、2~3年前から犬を飼育。11/7突然、上腹部痛、数日で回復。同年9月上旬、再度激烈な上腹部痛、同12月再々発、受診。熱感(+)、黄疸(+)、肝臓は右季肋下4横指触知。胆石症と考へ、診察数日で緩解。その後、同様発作を反復するため、濾過したところ、3月中旬便中に糞状物を発見、以後時折同様物体を排泄、鏡検により囊内に包虫鉤、原頭節を検出、胆石症は誤診と判断し、3/26治療のため京都医大へ入院	32	藤井班象	1912
33	女	45	農婦/ 症例 1	40	福岡県筑紫郡		【肝・腹膜単包虫症】 生来健康、17歳で結婚、3人の子供も元気。夫との接触なし。1910/1.22初診。約10年前、右季肋部鶏卵大円形腫瘍に気付いたが他症状なく放置。以後、腫瘍は漸次増大、3年前小児頭大に達した。2年前の春、急性胃腸カタルから軽い栄養障害になることを繰り返した。昨4月、突然、原因不明の尿閉が4日間続いたが、医治により以後回復していない。また、過去に発熱、黄疸、浮腫、皮疹はない。開腹手術3回(10/1.27.5.15、11/1.28)。肝病巣が輸尿管に穿孔して乳び尿を来たし、腹腔にも穿孔し多数の腹膜包虫を形成していた。	33 36	三田源四郎 Mita G	1915 1918

No	性	年齢	職業	県	居住地	群	生活歴・臨床経過	文献	著者	刊年
34	男	60	剖検/ 1	-	-		【肝・肺単包虫症】 30年の経過をとり漸次衰弱した症例。剖検例。肝右葉割面中央に小林輪大包虫巣、横隔膜を貫通して右胸腔に侵襲、同大嚢腫形成。肝右葉下面にも嚢卵大嚢腫。肝左葉は代償性肥大。	34	児玉啄四郎	1916
35	男	40	剖検/ 2	-	-		【肝単包虫症】 17年の経過で、末期に高度黄疸を呈した。剖検例。強く萎縮した肝左葉下面に嚢大嚢腫。胆嚢、胃と癒着、幽門後壁に穿孔、左輸胆管とも交通。肝右葉上面にも小嚢胞あり。	34	児玉啄四郎	1916
36	男	52	剖検/ 3	-	-		【肝単包虫症】 直接死因は脳軟化症。肝左葉左端に嚢大嚢腫。嚢腫の一部、石灰化。横隔膜と癒着。	34	児玉啄四郎	1916
37	女	48		46	鹿児島生		【肝単包虫症】 生来健康、16歳で結婚、1女の母。20歳時流産。約20年前から毎年12回、胃虚痛発作あり、注射で治療。黄疸、嘔吐無。右季肋下小嚢腫を触知。約7年前、台湾移住、医師に肝腫大を注意されたが服薬で縮小傾向あり、放置。3、4年前から喘息発作著明、入院中、喀痰に白色豌豆大物質混在。犬は好きだが飼育したことなし。17/3.28初診、右季肋下に手拳大表在性嚢腫、波動(+)、肝に連接、5/18開腹手術。穿刺で無色透明液、大小、無数の娘胞を排出、嚢壁を摘除。6/30退院。	35	小池百蔵	1917
38	男	48	農業/ 症例 2	46	鹿児島県 薩摩郡		【肝単包虫症】 生来健康、健児の父。特殊なし。犬との接触はない。1910/12.3入院。約10年前、腹部全体の膨満。数年来膨満著明となり、某区より約3ヶ月間茶養療法、利尿剤投与を受けかなり縮小。6年前、黄疸出たが、治療せず消褪。時々、よく利尿時、右下腹部鈍痛。腹部は全体に著明に膨満。手術(12/10)：15cm切開した腹壁内は腹膜と癒着した巨大な嚢胞壁に占められ、内容液量9.5L、豌豆大程度の娘胞約250個を数えた。術後経過良好、約2週間で肝臓の空洞縮小、3/1退院。昨秋、患者から来信、退院後数ヶ月で創口は完治、現在は全く健康であった。	36	Mita G	1918
39	女	27	農婦/ 症例 3	40	福岡県糟 屋郡の炭 鉱		【肝単包虫症】 父は4年前脳溢血死、母は健在。1911/8.24入院。小児期は健康だった。犬との接触は皆無。21歳で結婚、22歳で第1子出産。子は健在。8年前、軽い心窩部膨隆に気付き、漸次増大し、時々右季肋部鈍痛を感じるようになった。消化不良、便秘なし。腹部は臍上2横指膨隆し、人頭大の嚢腫を触れ、接触、呼吸により可動、波動(+)、圧痛(-)。経腹嚢腫の診断で手術(8/31)：心窩部一臍上正中切開で肝と胃の間に人頭大嚢腫露出、包虫巣の起点不明。嚢壁と周辺腹膜間にヨドホルムを塗り、癒着形成。9/2再手術：嚢胞壁を切開、内容を排除、ヨドホルムをして嚢壁を腹壁に縫合し手術終了。術後経過順調、3週間は分泌液があったが、10月初には嚢胞縮小し、分泌殆どなく、栄養状態改善。10/30退院。以後経過不明。	36	Mita G	1918
40	男	39	症例 4	40	福岡県田 川郡		【肝・腹膜単包虫症】 1904/8.15入院。17歳で黄疸。19、30歳でマラリア罹患。幼時、犬と密接な接触有。4年前、右心窩部に児頭大の嚢胞状嚢腫。波動(-)。手術(8/23)：開腹すると全腹腔とくに中央部と下腹部は大小様々の包虫嚢胞に占められ、個々の嚢胞は腹膜と網膜に結合癒着で付着、腹壁腹膜には特に多数の嚢胞付着、大網は無数の小嚢胞塊と化し、腹腔臓器と癒着していた。まず腹膜から出た嚢胞塊を摘出。次いで肝右葉下面から出た大嚢胞を切開、約500ccの透明液を排除。嚢を縫合して内嚢から包虫嚢を切除。肝臓と胃の間にある嚢胞から600ccの黄色混濁液を排除、嚢胞の開口部を腹壁に縫合した。肝後下面には児頭大と手拳大嚢胞が残った。その他数個の嚢胞があったが、患者の状態が悪いため手をつけず、腹壁閉鎖、腹壁に固定した嚢胞にヨドホルムを塗り、手術終了。術後、生食輸液を継続したが、全身症状改善せず、脈拍微弱、夕方に体温上昇、夜11時死亡。透明液には少量の蛋白と多量の食塩及び硫酸、混濁液にはコレステリン結晶と胆汁が含まれ、手術で得られた嚢胞総数は200に達した。	36	Mita G	1918
41	男	56	症例 5	43	熊本県球 磨郡中原 村生		【肝単包虫症】 1904/10.10入院。18年前、心窩部に嚢卵大の無痛性嚢腫を触知、年々増大し腹部が突出してきたが、労作時以外苦痛なかった。犬との接触皆無。上腹部に正中中部～左腹下に亘る大嚢腫による腹部隆起、波動著明。手術(10/20)：開腹後、肝包虫症と診断。肝左葉は包虫塊と化し、横隔膜と癒着。小網は中小嚢胞により大嚢胞塊を形成、胃、腸壁と癒着。肝右葉の一部にも包虫。まず腹膜から出た児頭大嚢胞を周辺嚢胞から注意深く剝離、右葉切開により多数の娘胞と壊死組織排出。左葉の包虫塊の一部を切除、残存空洞の内容を完全に掃蕩後、縫合閉鎖。最後に肝近傍の手拳大嚢胞を切除。包虫巣の完全除去は不可能なためそれ以上の手術は見合わせた。切開した肝右葉開口部は腹壁に縫合しヨドホルム挿入。術後経過は順調、発熱は術後4日間持続、全身状態は概して良好。分泌液は多量、後にやや減少。嚢胞分泌物の化膿に対し1%石炭酸洗浄、ヨドホルム施行。分泌物は減少、嚢胞は急速に閉鎖。11/29退院。以後経過不明。	36	Mita G	1918
42	男	10	小学生/ 症例 6	43	熊本市		【肝単包虫症】 1905/6.5入院。1、2歳で肺炎。5歳時、心窩部の鳩卵大嚢腫に母親が気付いた。翌年、嚢腫は鷲卵大に増大、その後、右季肋下の別の小嚢腫に家族が気付いた。以後、両嚢腫は他症状なく増大。右心窩部に肋骨弓から半月形に隆起。この嚢腫の下に2つの嚢腫状小隆起。手術(6/9)：正中開腹で巨大な包虫嚢胞出現、嚢胞は肝右葉下面から出て胃、十二指腸、大網と癒着。この嚢胞を周辺から剝離、腹腔外に出し、嚢胞液を一部除去後、嚢壁の1/4切除、嚢壁の全切除は大出血の虞あり、残余嚢壁を腹壁に縫合。腸胃高の別嚢胞も穿刺し、嚢壁を掻爬、石灰酸液洗浄、嚢内ヨドホルム充填し手術終了。夕方、患者は高熱、脈拍微弱、嘔吐、痙攣、不穏状態。夜、死亡。	36	Mita G	1918
43	男	40	独人 捕虜		愛知県	外国人	【肝包虫症】 食道とその気道穿孔で死亡したドイツ人捕虜の剖検で、偶然、肝臓に発見された。肝臓下縁、胆嚢付近に下方に突出し小鷲卵大嚢腫、波動(+)、内部に大小33個の娘胞。また、内部に原頭節を認めた。	37	向山孝之 大島福造	1918
44	男	55					【肝単包虫症】 24、5年前、左上腹部に手拳大嚢腫を発見、疼痛(-)、2年前から咳嗽喀痰。肺結核で死亡した男性の脾臓に偶然発見された単包虫症。脾実質内から出た単包虫症で、嚢腫壁全体が石灰化していた。	38	高根一二	1921
45	女	48	販売 業		宮城県登 米郡		【肝単包虫症】 宮城県下を転々と居住。感染経路不明。結核死の剖検時に偶然発見。両肺、腸、肝、脾すべて結核侵襲。肝臓は右葉、右葉の右側、肝右葉前縁に近い肝実質深部にφ4.5cmの包虫。娘胞多数、嚢胞液は少量、帯緑黄色、稀薄、やや混濁。鏡検により鉤検出。原頭節の残骸(+)。	39 40	桂島忠良 桂島忠良	1926 1928
46	女	30	バイン 人修 道女	14	横浜市在 住	外国人	【肝単包虫症】 生来健康、数年前来日し、横浜市在住。3年前から季肋部激痛、圧迫感。半年前から不整発熱、39℃前後、悪寒あり。右季肋部に2手拳大嚢腫、圧痛(+)、白血球増多あり、手術時、多数の包虫娘胞とともに排出した嚢胞液は、淡黄色、粘潤、無臭、グラム陰性桿菌(肺炎桿菌)陽性。	41	真柄正直	1933
47	男	47	造船 工		長崎市		【肝単包虫症】 14年前、半年間、青島在住。当時、自宅付近に屠場あり、獣皮を干していた。約12年前、上腹部の膨隆に気付いたが、1932/8頃、上腹部激痛あり、嘔気、下痢の後、膨隆が一時消失したほか特別の症状なく放置。上腹部に人頭大嚢腫、圧痛(-)、波動(+)、膝蓋嚢腫疑で手術(3/12.12)：開腹後、嚢腫壁を腹壁に縫合、8日後嚢腫切開、内容物約3gを排除。内容は大小娘胞と膜様物、娘胞内に原頭節、鉤多数。他に2個の手拳大嚢腫を認めたが、後日を期し、退院(12/22)。	42 43	末次逸馬 井手政雄	1934
48	男	13		46	鹿児島県	不明	【肝単包虫症】 抄録題名、演者、学会名の記録のみ(病歴照会(2002/8)：病歴照会、詳細不明；性別、年齢は文獻67から)	44	池平博	1952
49	男	31	鉄道 員	31	鳥取県	海外	【肝・肺単包虫症】 1946-47捕虜、シコク拘留。屢々、犬、羊等の肉・内臓を生食。3年来、呼吸時、心窩部膨満感、疼痛。1年来、左心窩部の隆起。54/10.23初診。心窩部とくに左季肋部隆起、手拳大嚢腫。	45 49	宮川照男 Miyagawa T	1957 1959
50	男	61	大工	13	東京?	海外	【肝単包虫症】 10歳時から39年間朝鮮各地に居住。幼時から猫を愛玩、1恐らく猫からの感染(著者)。1955/10.12吐血、慢性胃炎+高血圧症として医治、約1ヶ月入院、軽快、退院。肝2横指触知、好酸球増多(+)。1956/8.18心窩部痛、食欲不振で初診。肝硬結触知、胃XPに円形石灰化増。1957/7.6飲酒後、腹部痛、注射で軽快。2日後、腹部膨満に気付き、7/15精査のため入院。腹部膨満高度、肝2横指触知、右季肋部に嚢卵大硬嚢腫。下腹浮腫(+)。腹水2000cc。好酸球増多(3~7%)。肝機能ほぼ正常。胃XPで肝下縁に嚢卵大石灰化巣。投薬1Wで浮腫、腹水消失。肝縮小、嚢腫消失したがXP所見普通。10/8軽快、退院。	46 47	菅野茂雄 菅野茂雄	1958 1958
51	女	49	主婦		岐阜県		【肝単包虫症】 1942年頃から全身倦怠感、右季肋部不快感、医師から肝臓が悪いと言われたが肝腫脹なく病名不明。1950/8頃、肝腫脹に気付いた。1954/8、肝腫脹が右腸骨窩に達するほど増大し、入院。XPで包虫嚢腫陰影、穿刺で硫酸(+)、虫体を認めず。肝単包虫症と診断。	48	杉山正雄	1958

No	性	年齢	職業	県	居住地	群	生活歴・臨床経過	文献	著者	刊年
52	男	7		富山県			【肝包虫症】 巨大な包虫嚢胞+膿瘍を外摘非破法で著しく好転させた。(病歴照会(2002/8): 病歴不明、詳細不明、性別、年齢は文献67から)	50	古戸節郎	1959
53	女	48	フランス人/主婦	東京都?	海外		【肝単包虫症】 22歳までフランス居住。23歳で日本人と結婚、来日。患者の母親は約40年前肝臓腫瘍で手術。数年前から上腹部膨満感、胃圧迫症状(+), 肝臓腫瘍に気付いた。1955/6.22精密のため入院。XPで肝右葉にφ10cmの腫瘍、左葉にも同様腫瘍4。切開し、膿液200~400cc排除。鏡検で単包虫。1959/8術創から嚢胞排出。1960/1.20上腹部膨満感、発熱で再診。肝右葉にφ15cm、左葉にφ10cmの嚢胞各1。内容液排除、内臓痛、リンパ腫。以後、患者は元気に生活している。	51 52	鈴木禾浦 鈴木禾浦	1960 1960
54	男	55	農業	長野県			【肝単包虫症】 1948年頃から右臀部に神経痛様疼痛。1962年初から膀胱直腸障害、騎馬痔状知覚麻痺が著明になり来診。造影で第5腰椎以下の完全閉塞、XPで仙骨骨部の破壊像。手術(62/10.5): 仙骨骨部に空洞、12cmの白色嚢胞10数個排出。鏡検で嚢胞嚢虫。(病歴照会(2002/8): 他臓器病巣は病歴不明)	53	加幡一彦	1963
55	男	28	商社員	東京?			【肝単包虫症】 2年間、外国商社勤務、帰国後の健康診断で両側肺野に転移性肺癌様円形陰影を指摘され受診。1963/7左下肺葉、同10月右下葉切除。頭部、鉤嚢嚢	54	本間彬	1965
56	男	45		熊本県玉名郡	海外		【肝単包虫症】 1923年生、1939~45年、北支那張家口居住。1962/6頃から心窩部鳩卵大腫瘍、7月試験開腹、肝左葉全体を占める白色球状腫瘍嚢胞、肝嚢として切除せず閉鎖。1968/9腹部手術創に腫瘍発生、12月試験開腹、包虫嚢胞2個排出、16日嚢胞自然排出、液中に原頭節確認。以後、69/4までにφ1~70mmの嚢胞約500個排出。現在、ほぼ健康に生活。	55 56 57	宮川三男 岡村一郎 岡村一郎	1969 1970 1970
57	男	18	高校生	北九州市門司区	原発		【腹膜単包虫症】 北九州市に生まれ、海外生活経験無。6歳時、発熱腹水で入院、全治。1967年夏、上、中、下腹部の腫瘍に気付いた。1968/4.3開腹、腫瘍嚢胞、鏡検で包虫嚢と診断。68/5.1第2回開腹: 腹腔全体に広がる嚢胞を摘出。69/3.11第3回: 娘胞11個摘出、3/20第4回: 娘胞8個摘出。4/20悪寒、弛張熱、ビチン2週間投与で解熱。9/20第5回開腹: 肝左葉下部と横隔膜下の嚢胞4除去、ドレーン挿入。70/1.24リンパ除去、2/20.26嚢から娘胞多数排出。8ヶ月で発熱閉鎖。腸閉塞のため7/9第8回開腹: 娘胞4個摘出、ビチン2.7g/日投与で終快。	58	田坂肇	1971
58	男	45	会社員	東京都?	海外		【肝単包虫症】 20~22歳満州居住。2週間前から上腹部痛、右季肋部圧痛。肝3横指触知、φ3.5cmの腫瘍、波動(+). 肝腫瘍として手術、肝右葉の児頭大嚢胞摘出。内部に約40個の娘胞、鏡検で原頭節。術後1ヶ月で退院。	59 60 61	北原電子他 宮内甫他 宮内甫他	1971 1973 1973
59	女	54 60	主婦	東京都?	海外		【腎単包虫症】 1936~46年満州北部居住。1938年頃、右側腹部に夏ミカン大腫瘍触知。1972年、同腫瘍は児頭大に増大。宮村ら(56)により右孤立性嚢胞として手術、大嚢胞内に小豆大~鶏卵大の娘胞多数。鏡検により包虫症。1977/1再入院。右腎包虫症再発として手術、右腎及び周辺臓器摘出。術後8ヶ月で再発無。	62 65	宮村隆三他 横山博美他	1973 1978
60	男	62	養鶏業	東京都?	海外		【肝単包虫症】 戦時中、北滿と北海道で兵役。1975/5末、食後突然右季肋部痛、医診により好転せず、疼痛頻発。6月初、黄疸、右季肋部痛、肝腫大で受診。左肝腫瘍の胆道穿破を疑い手術: 肝左葉切除、総胆管T-T管。内容物の鏡検により単包虫嚢胞嚢虫。術後1年5月経過、再発無。	63 64	今泉俊秀他 羽生富士夫他	1976 1977
61	男	55	市場仲買	大阪市西成区	不明		【脳単包虫症】 動物飼育歴、海外滞在歴不明。1977/6物忘れ、左片麻痺で入院。CTで左後頭葉腫瘍として手術。摘出標本から単包虫嚢胞嚢虫。術後、麻痺は軽快。感染源不明。(病歴照会: 2002/8)	66	中川秀光	1978
62	女	74		福岡県	不明		【肝単包虫症】 心窩部痛を訴え来院。超音波、CTで肝右葉に多発性嚢胞とこれら全体を包む小児頭大球形外殻。多包虫嚢胞補体結合抗体(+). 胆道感染と肺炎併発するも抗生剤にて軽快。外科的治療は行わなかった。	67	中野均他	1982
63	男	3		東京都	海外		【肺肝単包虫症】 トルコ、ヨルダン居住歴有。咳嗽、発熱、好酸球11%。CT、超音波で右下肺1、肝右葉2円形陰影。肺嚢胞嚢虫、肝嚢胞嚢虫、内部洗浄後摘出。術後経過順調。	68 69	須藤憲一他 須藤憲一他	1982 1982
64	女	54	主婦	青森県八戸市	原発		【肝単包虫症】 八戸市で出生、16-18歳仙台市、18-20歳京都市、20-25歳小樽市住、25歳で結婚、現住地。海外居住歴、大飼育歴無。1979年から生理時に下腹部不快感、腫脹感。1980年腫瘍の増大感。1982/7.27婦人科受診、多発卵巣嚢腫と開腹手術、腹腔内に最大手拳大嚢胞約10個、肝右葉は殆ど嚢胞で占拠、嚢胞切開で一時ショック症状。嚢胞10数個を摘出。肝右葉背部の嚢胞は切除不能。娘胞、包虫砂無数。ハンダゾール300mg/day 2クール実施中。母包虫の縮小(-)	70 71 72 76	山口富雄他 松井雅之他 松井雅之他 山口富雄他	1983 1984 1984 1986
65	男	61		愛媛県宇和島市	海外		【肝単包虫症】 日中戦争で中支出征の際、軍用大筒筒保。最近、座骨神経痛治療中、偶然、XPで右上腹部に石灰化陰影。エー、CT、肝ソノで肝単包虫嚢胞を疑い、嚢胞摘出。包虫は完全に壊死、免疫原性も消失していた。	73	宮内聡一郎他	1984
66	男	51	石油会社員	東京都	海外		【肺肝単包虫症】 山口県生、1956年から東京都在住。'62年4月カゼンで潜伏約10日、80年カゼン、'81/2.3月インに各2~3週間潜伏。'82/6検診で肺野異常陰影を指摘され、同年6/16気管支嚢腫嚢嚢で肺右葉切除。同時に施行の肝CTで肝嚢嚢を認め、経過観察中。'84/1肝機能障害、肝嚢嚢増大、入院。CTで肝に円形の境界鮮明な嚢嚢。開腹、嚢嚢内容液吸引により包虫砂、原頭節確認。嚢嚢内膜剥離、嚢嚢外膜空腸吻合。術後3週からflubendazole使用。経過良好。1年後CTで空嚢嚢小	74 75	川島紀文他 川島紀文他	1985 1986
67	男	61		東京都	海外		【肝単包虫症】 満州渡航歴有。人間ドック超音波検査で肝右葉後区域にφ6cm嚢胞。右季肋部鈍痛のみ、黄疸(-)。道徳研・血清抗体(-)。手術後、頭部確認	77	洞ノ口佳亮他	1986
68	男	47		千葉県	海外		【肝単包虫症】 1968年から中近東への出張頻回。'80年イラク滞在中に心窩部痛、放置。'81年帰国、肝嚢嚢嚢嚢を指摘され定期検査。'88年3月高熱、心窩部痛、肝右葉腫瘍(φ14cm)脾上嚢嚢嚢(φ9cm)として手術。術後、原頭節確認。血清抗体(+). 予防的メベンダゾール投与。以後、抗体価漸減、再発兆候無	78	水谷正彦他	1989
69	男	54		茨城県	海外		【肝単包虫症】 南米、中近東、東南アジアに頻回出張。1992年3月29日、昼食後嘔吐、下痢、以後微熱持続。4/14上腹部痛、白血球増多、入院。CT、超音波で肝左葉に巨大嚢胞、5/13嚢胞液細胞診で単包虫嚢胞、5/20肝外側区域切除術、経過良好。メベンダゾール外来投与中	79	松田圭二他	1993
70	男	28	ネパール	愛知県	海外		【肝単包虫症】 ネパール生、1996年3月来日、6/18上腹部腫瘍で入院。超音波で肝左葉に巨大多房性嚢胞3。CTでφ11cm、7.5cm、6.2cmの嚢胞3。血清抗体(+). 肝左葉切除、嚢胞液から原頭節。	80 81	鈴木秀昭他 矢田啓二他	1998 1997
71	男	35	看護師/JICA研修生	東京	海外		【肝単包虫症】 来日時検診で頸動脈血尿(+). 超音波、CTで肝嚢嚢S6にφ6~7cm嚢胞、内部に娘胞5。抗体(+). アルベンダゾール800mg/日、28日、休薬14日を1クールとして3クール実施。画像上の娘胞消失。帰国。	82 83 87 89	木村幹男他 Ito A. et al Kimura M. et al 伊藤亮他	1998 1998 1999 2000
72	男	18	中国残留孤児子弟	大阪	海外		【肝単包虫症】 16歳まで中国ヘルピン市在住。農業、8歳まで大飼育。飲水は井戸水。1998年7月心窩部痛、嘔気・嘔吐で来院。好酸球数増多、軽度肝機能異常、超音波で肝S5、S6に嚢胞2。肝部部分切除、原頭節多数。術後経過良好。	85 86 88 89	土崎真他 遠山峰子他 有本明他 伊藤亮他	1999 1999 2000 2000
73	男	27	アルゼンチン	福島県	海外		【肝単包虫症】 生後5歳までアルゼンチン在住。腹痛、嘔吐で近医受診、CTで肝右葉に大嚢胞。血清抗体(+). 経皮肝穿刺で無菌透明液。拡大肝右葉切除、術後経過良好。	89	島山優一他 伊藤亮他	2000 2000
74	女	81	事務	長崎県	海外		【肝単包虫症】 満州(長春、ハルビン、奉天、克山等)居住、1946年引揚。以後、長崎、鳥取、愛媛、長崎居住。2001年、健康診断胸部X Pで右横隔膜挙上。腹部CTで肝嚢嚢。石灰化。高齢のため手術せず経過観察。	91	小島博他	2001
75	女	55	小売業/バー	滋賀県	海外		【肝単包虫症】 ベルギー生。チリ('97)、イラン('99/4ヶ月/犬の居ない所)滞在歴有。22年前から大飼育。数ヶ月前から腹部膨満感。シャワーの後、胸内苦悶、嘔吐3回、悪寒、擦子をみたが改善せず緊急入院。到着時、体温38.8℃、血圧91/51、全身皮膚発赤、胸痛、腹痛を訴え、腹部CTで肝左葉に嚢胞(φ6-7cm)。Abscessとしてドレーナージ、検体からエキノコックスを検出。肝包虫症と診断。7/17肝S3部分切除手術。Em-ELISA(+). 術後経過良好。9月帰国予定。	92	感染症週報	2002

誤診・誤記載・診断変更症例

No	性	年齢	職業	県	居住地	群	生活歴・臨床経過	文献	著者	刊年
F1	男	29	歩兵軍曹/農業	16	富山県中新川郡		【皮下・筋肉内単包虫症→有鉤囊虫症の誤診例】 幼時、熱病2ヶ月、20歳下疳、他に苦患なし。'02/12入隊、以来外傷等なし。'05/1.2日露戦従軍、同5月～'06/1迄満州産小犬を愛玩、起臥を共にした。1月末帰国、同5月頃から右頸下に移動性の硬性球形小腫瘍を触知、'08/9頃左右前腕にも同様腫瘍を触知するも、他症状無く放置。'09/3初旬、原因不明の下痢、投薬で全治に至らず受診。腹部触診で左側腹壁、右大腿内側、左大胸筋、右頸下、右側胸部等に小指頭大から豌豆大までの弾性硬の無痛性腫瘍あり、数個を試験摘出したところ、内容液は食塩・琥珀酸(+)、蛋白(-)。皮下・筋肉単包虫症と診断し、局所麻酔下に摘出手術実施、全身総数52個に及んだ。9/15全治退院。	F1	柴田健次郎	1911
F2	男	12	-	-	-		【眼球単包虫症/疑問例→有鉤囊虫症か?】 視力奪。硝子体剥離の如く光沢ある孤立結節状を呈し、肉腫と思ったが、翌日「アトロピン点眼下で長時間検査したところ、中央部から震動しつつある頸部が反射して現れ、直ちに包虫症と診断」。眼球摘出できず、確診に至らなかったが、所見から「眼球単包虫症」は疑問。	F2	丸尾晋	1912
F3	?	?	?	?	?		【陈旧肝単包虫症抗体陰性例】 20年以前ノDr. ベルツ診断例。内科的治療ヲ施シツツ一昨年ニ至リ試験穿刺ニ繼發シテ化膿ヲ来シ著シク膨大セルモノ。褐色混濁セル内容物。抗体陰性例。	31	小山憲佐	1912
F4	男	41		27	大阪		【脳包虫症として学会発表→抄録に有鉤囊虫Taenia soliumの記載有。誤記例】 主訴：てんかん発作、皮下腫瘍多発。文中に皮下腫瘍(Taenia solium)摘除の記載あり、抄録表題誤記例。	F3	泰井俊三他	1963
F5	男	78	-	44	大分県東国東郡国見町	海外	【皮膚単包虫症→多包虫症/診断変更例】 戦時中、北海道、千島、満州、シベリに滞在歴。昭和57年右側腹部に皮下結節、切除。昭和58年同部に再発。昭和59年切除、組織学的に多包虫症と診断。腹部CTで肝右葉に多発性嚢胞。皮下と肝病巣は接続。7-Me-V-Solで皮下結節縮小、肝嚢胞に著変なし。 【初め単包虫症として報告、1997年第298回皮膚科学会福岡地方会で多包虫症と修正。本報では千島・シベリ等居住歴から多包虫症説を採用】		石井洋一他 入来敦他 Ishii Y, et al 入来敦他 板倉英酒他	1985 1986 1986 1987 1997
F6	女	74	農業	43	熊本県		【肝脾大腸単包虫症/疑問例】 関節リウマチをステロイド治療中、穿孔性腹膜炎で死亡。病理組織切片に包虫の所見無し。生前、洋犬2頭を飼育していた。同居家族3人Eg/Em抗体(-)だった。		病理剖検報 報(熊本病院病理)	1997

単包虫症例参考文献 (1881-2002 : 刊年順)

2003/3.14 改訂

No	著者	論文表題	雑誌	巻号頁	刊年	抄/論
1	熊本医学校1級生某	脾臓エヒノコックスの発見	東京医事新誌	164, 13-17	1881	論
2	志村玄洋	肝臓「エヒノコックス」治験	東京医事新誌	233, 11-16	1882	論
3	志村玄洋	肝臓「エヒノコックス」治験(承前)	東京医事新誌	234, 9-14	1882	論
4	高畑挺三	右側股関節包虫嚢腫実験	東京医事新誌	487, 145-149	1887	論
6	高畑挺三	右側股関節包虫嚢腫実験(続稿)	東京医事新誌	488, 187-191	1887	論
6	大澤岳太郎	股関節包虫症実験の概略	東京医学会雑誌	3, 165-167	1887	論
7	毛利文啓	肝臓包虫嚢腫治験	東京医事新誌	520, 386-392	1888	論
8	神戸文哉	肝臓包虫	大阪興医学社月報	3, 100-108	1889	論
9	伊藤準三	包虫伝染追加	東京医事新誌	616, 81-83	1890	論
10	谷口長雄	4名の内臓包虫患者に就て	東京医事新誌	876, 73-75	1895	論
11	谷口長雄	4名の内臓包虫患者に就て(承前)	東京医事新誌	877, 129-131	1895	論
12	谷口長雄	4名の内臓包虫患者に就て(完)	東京医事新誌	879, 218-220	1895	論
13	澤辺保雄、西村貞三郎	肝臓エヒノコックスの一実験	大阪医学研究会雑誌	37, 1484-1486	1897	論
14	田中民夫	胸壁肋膜に発生し肋骨及脊椎骨を侵襲せる包虫	東京医事新誌	1030, 24-28	1898	論
15	角田隆、浅山協太郎	包虫病の一実験	東京医事新誌	1077, 2867-2874	1898	論
16	赤星弥藤次	単房性肝臓包虫の1治験	研瑠会雑誌	30, 26-31	1899	論
17	西村貞三郎、脇本正夫	肝臓包虫の1例	岡山医学会雑誌	141, 344-349	1901	論
18	林 芳輝	肺臓包虫一例	研瑠会雑誌	55, 7-10	1903	論
19	藤井寿松	肝臓包虫嚢腫ノ1例ニ就キテ	医事新聞	663, 817-829	1904	論
20	藤井寿松	肝臓包虫嚢腫ノ1例ニ就キテ	鉄西医報	81, 10-16	1905	論
21	三浦隆之助	「エヒノコックス」の供覧	東京医事新誌	1502, 496-497	1907	論
22	高安道成	肝臓「エヒノコックス」に就て	東京医事新誌	1509, 850-851	1907	論
23	山崎正薫	腹腔及腸系膜に発生セル包虫嚢腫ノ1例ニ就キテ	医学中央雑誌	5, 1473-1479	1908	論
24	三宅 速	包虫病ノ3例	医事新聞	773, 1-8	1909	論
25	北野栄次郎	肝臓包虫ノ肺臓ニ穿潰シテ治癒セシ一例	九州医学会誌	10, 100	1909	論
26	久木田盛哉	奇異ニ結果セシ包虫嚢腫ノ一例	九州医学会誌	9, 199	1909	論
27	瀬上弘庵	肺臓包虫ニ因スル咯血ニ就テ	九州医学会誌	9, 59-62	1909	論
28	田吹 康	包虫病ニ就テ	九州医学会誌	10, 204	1909	論
29	斎藤信輔	肝臓包虫嚢腫ノ1例	研瑠会雑誌	97, 42-48	1910	論
30	岡場不二彦	腹腔包虫嚢腫ノ一手術例	北海医報	41, 1-16	1910	論
31	小山憲佐	包虫病の血清診断ニ就テ	軍医団雑誌	29, 1117-1120	1912	論
32	藤井班象	肝臓「エヒノコックス」ノ一例	軍医団雑誌	34, 1711-1715	1912	論
33	三田源四郎	「エヒノコックス」ノ見聞補遺	日外会誌	16, 15-21	1915	論
34	児玉琢四郎	肝「エヒノコックス」3例ノ供覧	日病会誌	6, 255-258	1916	論
35	小池百蔵	肝臓包虫嚢腫治験一例	台湾医学会雑誌	179, 557-562	1917	論
36	Mita G	Beitrage zur Kenntnis des Echinokokkus mit Berücksichtigung des Alveolar echinokokkus.	Kaiserlichen Universität Kyushu	4, 155-393	1918	論
37	向山孝之、大島福造	包虫病ニ就テ	中央医学会雑誌	25, 381-393	1918	論
38	高根一二	脾臓包虫ノ一例	医事新聞	1094, 599-604	1921	論
39	桂島忠良	人體えひのこつくす嚢腫ニ就テ	日病会誌	16, 286-292	1926	論
40	桂島忠良	東北地方ニ於ケル狗猿虫嚢腫ニ就テ	東北医誌	11, 245-285	1928	論
41	真柄正直	肝臓エキノコックスに混合感染を来せる肺炎桿菌	東京医事新誌	2891, 1898-1900	1933	論
42	末次逸馬	肝臓Echinocoecusノ1例 特ニ其ノ組織的所見ニ就テ	日本レントゲン会誌	12, 127-131	1934	論
43	井手政男、吉雄敏三	肝臓包虫嚢腫の1例に就て	グレンツゲヒート	8, 1035-1045	1934	論
44	池平 博	肝包虫症の1症例	第5回日本寄生虫学会九州地方部会講演要旨	24-25	1952	抄
45	宮川照男		診断と治療		1957	論
46	菅野茂雄、茂垣剛	肝臓エヒノコックスと思われる一症例	日大医誌	16, 2549	1957	抄
47	菅野茂雄、横山良部、茂垣剛、坂元孝、山崎耐介	肝エヒノコックスと考えた1例	日本臨床	16, 1107-1112	1958	論
48	杉山正雄、加藤宏、堀澤壽雄	東濃地方に発生せる肝包虫症の1例	日内会誌	47, 164	1958	抄
49	Miyagawa T, Yamada A, Igaki A, Morishita T	Röntgenologische Studien über den Echinocoecus cysticum pulmonum	Yokohama Med Bull	10, 206-227	1959	論
50	古戸節郎、黒田藤平	肝臓エヒノコックスの1例	日外会誌	59, 1916	1959	抄
51	鈴木禾浦、H. Plessner、岡村マリ子	包虫症の1例	寄生虫誌	9, 364	1960	抄
52	鈴木禾浦	包虫症 (Echinococcosis)	慈恵医大誌	75, 2778	1960	抄
53	加藤一彦、渡辺信助、三東雄一	仙骨に発生した骨Echinococcus症	日整外会誌	37, 150	1963	抄
54	本間彬、松井明、正木幹雄	両側肺切除を行ったHydatid Disease	日胸疾会誌	3, 201	1965	抄
55	宮川三男、財津史郎、田宮貞俊、古閑光人、岡村一郎、富田精一郎	人体包虫症の1例	寄生虫誌	18補: 697-	1969	抄
56	岡村一郎、富田精一郎	九州に於けるEchinococcus症	寄生虫誌	19, 371	1970	抄
57	岡村一郎、富田精一郎、安田一行、谷田末高、鈴木康民、田宮定俊、古閑光人	最近遭遇した珍しい寄生虫症	熊本医会誌	44, 250	1970	抄
58	田坂巖、岡正一、財津吉憲	北九州市常住者における単房性包虫症の治療	寄生虫誌	20, 262-263	1971	抄

No	著者	論文表題	雑誌	巻号頁	刊年	抄/論
59	北原範子, 村上義次, 養沼義興, 相磯嘉孝, 片野てい子, 新田義明, 角田孝徳, 中村嘉孝, 町井彰, 牧素, 名尾良憲	肝包虫症の1例	日消病会誌	68: 1157	1973	抄
60	宮内前, 豊田哲夫, 森正徳, 川越常徳, 大竹弘司, 小林一三, 唐木一守, 村上義次, 北原範子, 名尾良憲	単房性包虫症の1治療例	外科	35, 335-339	1973	論
61	宮内前, 豊田哲夫, 森正徳, 川越常徳, 大竹弘司, 小林一三	単房性包虫症の1治療例	日外会誌	74, 490	1973	抄
62	宮村隆三, 田原達雄, 河田幸道	比較的稀な腎腫瘍の3例	日泌会誌	64, 254	1973	抄
63	今泉俊秀, 高田忠敬, 内田泰彦, 福島増彦, 松田滋明, 山名泰生, 中村光司, 菅木次男, 羽生富士夫	胆道突破を合併した肝包虫症の1例	日消病会誌	73, 1158-1159	1976	抄
64	羽生富士夫, 高田忠敬, 今泉俊秀	肝包虫症-胆道内突破を合併した1例を中心に	日外会誌	77, 55-60	1977	論
65	横山博美, 石田馨, 小磯謙吉, 小川秋実	腎包虫症(エキノコックス症)の1例	日泌会誌	69, 634-635	1978	抄
66	中川秀光, 滝本昇, 尾藤昭二	脳包虫症	脳神経	18, 397	1978	抄
67	中野均, 佐藤克昭, 岩崎正高, 江畑浩之, 阿部正秀, 川口元也, 安倍弘彦, 久保保彦, 谷川久一	特異なCT像を呈し、経過中に胆道感染および脾炎を併発した肝単包虫症の1例	日消病会誌	79: 1053	1982	抄
68	須藤憲一, 吉竹毅, 古瀬彰, 高山鉄郎, 安原洋, 三枝正裕	肺肝単包虫症の1手術治療例	日胸外会誌	30: 938	1982	抄
69	須藤憲一, 吉竹毅, 古瀬彰, 高山鉄郎, 安原洋, 浅野敏一, 三枝正裕, 相沢力	肺肝単包虫症の1手術治療例	胸部外科	35: 193-197	1982	論
70	山口富雄, 稲葉孝志, 高橋昭博	青森県における単包虫症の1例	寄生虫誌	32増, 509-512	1983	抄
71	松井雅之, 山口富雄	術中アナフィラキシーショックを起こした肝単包虫症の麻酔経験	麻酔	33, 917	1984	抄
72	松井雅之, 佐藤根敏彦, 小倉秀彦, 竹内泉, 松木明知, 尾山力	術中アナフィラキシーショックを起こした肝単包虫症の麻酔経験	麻酔	33, 194-197	1984	論
73	宮内聡一郎, 市川幹郎, 鈴木俊, 野中洋, 木下芳一, 渡辺潤, 田中統一, 山口裕国, 近藤俊文	支那事変で罹患し、自然治癒したと考えられる肝単包虫症の1例	日消病会誌	81, 1313-1314	1984	抄
74	川島紀文, 小林進, 河井啓三, 伊坪喜八郎, 松井健司	肝単包虫症の1例	日臨外医会誌	46, 1214-1215	1985	抄
75	川島紀文, 小林進, 河井啓三, 松井健司, 片倉賢, 小林昭夫	肺肝単包虫症の1例	外科	48, 429-431	1986	論
76	山口富雄, 稲葉孝志, 山下智, 高橋昭博, 桜田淑子, 小倉秀彦, 竹内泉, 相内晋	青森県下における単包虫症例	医事新報	3239, 29-34	1986	論
77	洞ノ口佳充, 森俊幸, 森塚俊彦, 瀬戸山隆平, 桐岡義康, 林文彦, 高博司, 島山茂, 河野信博, 長尾恒, 森岡恭彦	典型的CT像を呈した単房性肝包虫症の1例	日消病会誌	83, 144	1986	抄
78	水谷正彦, 橋川征夫, 千見寺徹, 古川薫, 坂谷喬起, 小関秀旭, 藤本茂, 下田直史, 笠貞順一	肝脾単包虫症の1手術例	日臨外医会誌	50, 1833	1989	抄
79	松田圭一, 姜達宇, 佐藤幸夫, 遠藤勝幸, 奥村裕, 朝原貞雄, 小路力男, 持地真行, 岡裕寛, 津田一, 高	肝単包虫症の1手術例	日立医会誌	30, 201-202	1993	抄
80	鈴木秀昭, 安井章裕, 重田英隆	術前診断しえた肝単包虫症の1例	日消外会誌	30, 411	1997	抄
81	矢田啓二, 佐藤正幸, 高村洋明, 鈴木英昭, 名倉英一	術中肝嚢胞液より認められた単包条虫の1症例	医療	51増, 102	1997	抄
82	Ito A, Okamoto M, Ishiguro T, Ma L, Suzuki H, Yasui A, Shigeta H, Matsuura T, Hosokawa T, Chai JJ	An imported case of cystic echinococcosis in Japan diagnosed by imaging and serology with confirmation of Echinococcus granulosus - specific DNA sequences.	Am J Trop Med Hyg	58, 790-792	1998	論
83	木村幹男, 岩本愛吉, 西村洋治, 橋本麻希, 江川民, 伊藤亮	ヨルダン人での単包虫症の1例 アルベンダゾールによる治療	日本熱帯医学雑誌	26増, 295	1998	抄
84	鈴木秀昭, 安井章裕, 重田英隆	術前に診断した肝単包虫症の1例	日臨外会誌	59, 463-467	1998	
85	土崎真, 三原康弘, 長井啓介, 真野和子, 竹田英世, 谷口敏樹, 小林一三, 木村連, 大崎往夫, 福山隆之, 他	肝単包虫症の一症例	超音波医学	26, 1224-1225	1999	論
86	遠山峰子, 鳥谷悦子, 三井啓子, 金子正彦, 三浦博良, 松本剛志	Echinococcus granulosus による肝嚢胞の一例	医学検査	48, 642	1999	抄
87	Kimura M, Nakamura T, Iwamoto A, Nishimura Y, Egawa T, Ito A	Cystic echinococcosis in a Jordanian patient: albenidazole in a short-term immigrant.	J Travel Med	6, 249-253	1999	論
88	有本明, 井上立崇, 玄徳敏一, 東山洋, 中島康夫, 花房徹見, 淳草実, 栗根弘治, 古形芳則, 高松正剛	肝単包虫症の1例	外科	62, 479-481	2000	論
89	伊藤亮, 石川裕司, 迫廉仁, 中尾隆, 中谷和宏	血清学的に容易に鑑別できた国内で経験した単包虫症4例について	日本熱帯医学雑誌	28増刊290	2000	抄
90	葛山優一, 若館学, 佐藤尚紀, 小山善久, 井上典夫, 竹之下誠一, 松島得好, 松本進, 竹内真一, 伊藤亮	肝単包虫症の1切除経験	日臨外会誌	61増刊649	2000	抄
91	小島博, 本合泰, 宮地克彦, 井上俊宏, 有坂好史, 平田一郎, 勝健一, 山本和宏, 荒木恒治, 名和行文	肝単包虫症(Echinococcus granulosus)の一例	第13回日本臨床寄生虫学会要旨	58	2002	抄
92	国立感染症研究所	滋賀県(単包虫症/中南米由来)	感染症週報 (http://idsc.nih.go.jp/ kanja/idwr/idwr2002- 27.pdf)	第27週, P. 21	2002	週報

総説論文

I	山下次郎	我が国に於ける包虫症に関する研究	寄生虫誌	8: 325-345	1959	総説
II	山下次郎	包虫および包虫症	日本における寄生虫学の研究(森下薫・小宮義孝・松林久吉編)	I: 385-433	1961	単行書
III	山口富雄, 稲葉孝志, 山下智, 高橋昭博, 桜田淑子, 小倉秀彦, 竹内泉, 相内晋	青森県下における単包虫症例	医事新報	3239, 29-34	1986	論

誤診・疑問・誤記・診断変更例

診	柴田健次郎	表在性(皮下組織及筋肉)多発性単房包虫ノ1例	東京医事新誌	1710, 695-702	1911	論
診	柴田健次郎	表在性(皮下組織及筋肉)多発性単房包虫ノ1例(承前)	東京医事新誌	1714, 932-940	1911	論
診	柴田健次郎	表在性(皮下組織及筋肉)多発性単房包虫ノ1例(完)	東京医事新誌	1717, 1089-1100	1911	論

No	著者	論文表題	雑誌	巻号頁	刊年	抄/論
疑	丸尾 晋	「デアローシス」及包虫ノ診断ニ付イテ	日眼会誌	16, 1155-1156	1912	論
記	秦井俊三	はじめ真性てんかんと誤った脳包虫病の1例	北野病院紀要	9, 32	1963	抄
変	石井洋一、他5	皮膚腫瘍を主訴とした包虫症例	寄生虫誌	34、増、86	1985	抄
	入来教、他3	包虫症	西日皮膚	48, 9-12	1986	論
	Ishii Y, et al	Subcutaneous echinococcosis: a case report from Kyushu.	Jpn J Parasitol	35, 269-272	1986	論
	入来教、他3	エヒノコックス症	皮膚病診療	9, 521-524	1987	論
	板倉英潤、他4	皮膚に再発を認めた包虫症の1例	西日皮膚	59, 305	1997	抄
疑	熊本大学医学部病理学 (10083)	胃穿孔性腹膜炎/肝脾大腸エキノコックス症 (偶然発見例)	病理剖検報	40, 346	1997	報

注：診=診察例、疑=疑問例、記=記例、変=診断変更例

## 家畜・動物の単包虫症

No.	著者	論文表題	雑誌	巻号頁	刊年	抄/論
1	一色於菟四郎	朝鮮牛に於ける包虫症に関する研究	日獣医誌	21, 71	1959	
2	一色於菟四郎	朝鮮牛に於ける包虫症に関する研究	日本寄生虫学会西日本支部第3回大会講演抄録	7	1961	
3	小野威、上田晃、北村之利、池下昭	十勝地方における家畜包虫症の病理学的研究	帯広畜産大学13回学術集談会記事	23-24	1963	
4	上山庄二	最近帯広屠場で認められた綿羊胞虫症の1例	食衛研	16, 57	1966	
5	大島寛一、伊藤隆夫、沼宮内茂、畠山得三、藤原欣也、川股行三	牛単包虫症に関する病理学的研究	日獣医誌	28付録, 490	1966	
6	大島寛一、伊藤隆夫、沼宮内茂、畠山得三、藤原欣也、川股行三	牛単包虫症に関する病理学的研究	日獣医誌	29, 89-93	1967	
7	兼丸卓美、兼子樹広、及川正明、桐生啓治、佐藤博	馬の肝における単包虫症の1例	日獣医会78回講演要旨	107	1974	
8	兼丸卓美、兼子樹広、及川正明、吉原豊彦、桐生啓治、佐藤博、小野威、広瀬恒夫	馬における肝単包虫の2症例について	日獣研報	13, 8-18	1976	論
9	星野久光、他2名	馬にみられた単房性包虫	日獣医会85回講演要旨	143	1978	抄
10	三田和正、宇佐美宏典、斎藤章博、長谷川隆、飼沼孝、小林一義、長谷部浩三、栗田吾郎、天野光彦、細川修、黒崎嘉子、松山充、渡辺昭宣	オーストラリア産輸入牛にみられた単包虫症について	食衛研	34, 473-485	1984	論
11	龍田桂吉、中嶋誠、塩見久章、高木裕、石本博夫、伊藤英夫、崎田茂、大沢嘉久、山本陽子、荻原孝三、秋山陽、畑野逸興	オーストラリア産輸入牛から発見された寄生虫症について	東京衛局会誌	73, 94-95	1984	抄
11	作井睦子、森田謙一、川崎孝治、市原敬、大藤進、高橋俊之、石下真通	オーストラリアからの輸入牛にみられた単包虫症について	北海道獣医師会誌	31, 170-171	1987	抄
12	山口敬治、神谷正男	輸入種馬に見られた単包虫症について	寄生虫誌	41, 63	1992	
13	作井睦子、森田謙一、大藤進、石下真通	オーストラリアからの輸入牛にみられた単包虫症とその類症鑑別	日獣医師会雑誌	45, 344-347	1992	論
14	岩田式行、西克彦、万波三朗	輸入牛にみられた単包虫症の5例	日獣医師会誌	46, 703	1993	抄
15	小島一、加藤敦	オーストラリア産直行牛に見られた単包虫症	日獣医師会誌	48, 519	1995	抄
16	国井悦子、太田垣寧、京塚明美	広島市と畜場で検出されたウシの単包虫症について	広島県獣医師会誌	15, 120-122	2000	論
17	Furuya K, Kawanaka M, Sato N, Horuma H, Tamura M	Has Echinococcus granulosus settled in Hokkaido?	Jpn J Infect Dis	53:176-177	2000	論



## エキノコックス流行モデル

季節的要因の影響と流行

石川 洋文<sup>1</sup>、大賀 潔生<sup>1</sup>、土井 陸雄<sup>2</sup>

1) 岡山大学環境理工学部環境数理科学、2) 横浜市立大学医学部衛生学

要旨 北海道におけるエキノコックス(*Echinococcus multilocularis*)流行は、主要な終宿主であるキツネと中間宿主である野ネズミに係わる感染環を通して維持されている。今回は、エキノコックスの流行について、キツネ、野ネズミに関わる季節的要因を考慮し、モデルの精密化を行い、流行についてのシミュレーション研究を行った。また環境中の活性虫卵密度に基づくヒトに対する感染危険度についての研究を進めた。

### A. 研究目的

北海道におけるエキノコックス(*Echinococcus multilocularis*)流行は、主要な終宿主であるキツネと中間宿主である野ネズミに係わる感染環を通して維持されている。本研究は、北海道におけるエキノコックス流行の予測、コントロール対策の効果判定、ヒトに対する感染危険度の判定等に資する伝播数理モデルの構築を目的としている。宿主動物の動態は、大きな季節的、年次的変動を示すことから、エキノコックス伝播シミュレーションを行うためには、宿主動態モデルとの協調が必要となる。今回は、宿主動物生態の季節的変動に加えて、野ネズミ密度の変動及び積雪量によるキツネに対するエキノコックス感染伝播、及び気温による虫卵活性期間の変動による野ネズミ感染伝播に対する影響を調べた。

### B. 材料と方法

1. エキノコックス流行モデル 平成13年度に報告した、主要終宿主(fox)、中間宿主の各動態モデル vole)、及び各宿主動物におけるエキノコックス伝播モデルを組み合わせた総合的なエキノコックス流行モデルについてその精密化をおこなっている。

2. キツネへのエキノコックス感染—キツネの食性関数 野ネズミか

らキツネへのエキノコックス感染の移行は、キツネがエキノコックスに感染している野ネズミを餌として摂取することによって行われる。キツネの野ネズミ1日当捕食数は野ネズミの個体群密度や気象条件に依存していると考えられる。本研究では、キツネの野ネズミ日捕食数(NVF)を表すものとして以下の性質をもつ食性関数を用意した。

(ア) 野ネズミ個体群密度に依存し、低密度より高密度へ個体群密度が増加するにつれて捕食数が指数的に増加し、高密度の時には、捕食数の増加度は減少して、最終的に、最大捕食数に飽和する。(イ) 積雪深に依存し、50cm以上の場合には、捕食不能となる。

3. 野ネズミへのエキノコックス感染—虫卵の活性度 環境中に排出された虫卵の感染能維持期間は、大きく気温に影響され、温度が高くなるにつれて急速にその活性を失うことが実験により確認されている。本研究では、野ネズミに対する感染影響要因として、この虫卵活性度を導入した。

4. ヒトに対する感染危険度

ヒトはエキノコックスに対して中間宿主の位置にあり、その虫卵の摂取により感染する。本研究では、環境中の感染活性のある虫卵量を指標として、地域、季節別の感染危険度を計算

した。

## C. 結果と考察

### 1. 疫学的パラメータの推定

今回は、北海道東部を研究対象地として、モデルに含まれる2つの未定疫学的パラメータの推定を行った。

2. シミュレーション 上記の前提に基づき、キツネ、野ネズミ両集団におけるエキノコックス流行率の推移に関するシミュレーションを行った。

### 2. 考察

i) 北海道東部根室、網走両地方ともエキノコックス感染キツネ密度は、繁殖期前がもっとも低く、初夏にそのピークを迎える。一方感染率の推移を見ると、秋に最大となり、前記のピークと異なる。エキノコックスの流行を解析するためには、感染密度に関する研究が重要となる。

ii) 根室地域、網走地域との対比により、積雪の影響による食性の変化と冬季のエキノコックス流行の変動の関連を調べた。この結果、積雪以外の状況がほぼ同じである両地方のフィールドデータに現れた感染率の相違が、シミュレーションを通して確認された。

iii) ヒトに対する相対的な感染危険度について、網走、札幌地区を対象としてシミュレーションを実施した。網走では、夏季にその危険度のピークを迎えるのに対して、札幌では、全体に低水準で明確なピークは見られなかった。

v) エキノコックス・コントロールに資するため、キツネの対する薬剤ベイト散布による効果を今後モデルに組み込む準備をしている。

## D. 研究発表

### (i) 研究論文

1) Ohga, Y., Ishikawa, H., Doi, R. and Ishii, H. (2002): Simulations on prevalence of *Echinococcus multilocularis* in Hokkaido on the basis of vole population dynamics, *J. Fac. Environ. Sci. Tech. Okayama U.* vol. 7, 1-5

2) Ishii, H., Ishikawa, H. and Ohga, Y. (2002): Mathematical model for the

transmission of lymphatic filariasis and its application, *J. Fac. Environ. Sci. Tech. Okayama U.* vol. 7, 7-16

3) Ishikawa, H., Ishii, A, Nagai, N., Ohmae, H., Harada, M., Suguri, S and Leafasia, J. (2003): A mathematical model for the transmission of *Plasmodium vivax malaria*, *Parasitol. International*, 52 (1) 81-93

4) Tsunekuni, Y, Ohga, Y. and Ishikawa H. (2003): Studies on the transmission model of HIV/AIDS among commercial sex workers in Thailand, *J. Fac. Environmental Sci. & Tech. Okayama U.*, 8 (1) 1-7

5) Ishikawa, H., Ohga, Y. and Doi, R. (preprint): A model for the transmission of *Echinococcus multilocularis* in Hokkaido, Japan.

### (ii) 学会発表

1) 大賀 潔生、石川 洋文、土井 陸雄 (2002) エキノコックス伝播数理モデルとそのシミュレーション：北海道における流行を対象として、第71回日本寄生虫学会大会

2) 大賀 潔生、石川 洋文、土井 陸雄 (2003) キノコックス伝播モデル：コントロールによる流行への影響及び感染危険度に関するシミュレーション、第72回日本寄生虫学会大会

エキノкокクス症の診断・治療法の開発-新規抗原遺伝子の獲得に関する研究

分担研究者 野崎 智義 国立感染症研究所寄生動物部 室長

協力研究者 藤田 修 同獣医科学部 研究員

研究要旨 エキノкокクス症の診断法を確立するとともに、抗原タンパク質の機能を理解することを目的として、本年度は抗酸化酵素の一つであるペルオキシレドキシシン(Prx)について検討した。我々が今回検討した多包虫 Prx 遺伝子のコードするタンパク質の推定分子量は約 21kDa で、48 および 169 アミノ酸残基には Prx 群で保存されているシステインが認められた。この 2-Cys 型 Prx のアミノ酸配列は現在まで報告されている様々な寄生動物種およびヒトを含む様々な哺乳動物種と高い同一性を示した。更に、大腸菌組換えタンパク質を用いたインビトロの系で thiol mixed- function oxidation (MFO) assay を行ったところ、10 $\mu$ g/ml 以上で酵素活性が認められた。中間宿主体内での多包虫は好气的環境に寄生し、酸化ストレスに曝露されている。Prx が多包虫の抗酸化機構に重要な役割を果たしていると考えている。

A. 研究目的

多包虫症は潜伏期が長いのが特徴で臨床症状が現れてからの治療は困難を極める。その為にも早期診断法・新規治療法の開発につながる寄生虫特異的な分子およびその機能の解析が急務である。我々はスナネズミ由来の多包虫組織から作製した cDNA 発現ライブラリーを、多包虫患者血清を用いてスクリーニングし新規抗原タンパク質遺伝子を獲得することを目的として、複数の有望な主要抗原遺伝子を獲得し、さらに組換えタンパク質を作成した。昨年度はアクチンモジュレータータンパク質(AMP)の診断抗原としての有用性、その生化学的性状および幼虫組織内での局在等を調べた。本年度は、診断抗原として有望なタンパク質の一つであり、抗酸化酵素の一つであるペル

オキシレドキシシン(Prx)について検討した。

B. 研究方法

1. Prx を構成するアミノ酸配列を既知のペルオキシレドキシシンと比較し、ClustalW にてアライメントを行い、比較を行った。
2. 大腸菌で発現させた Prx の組換えタンパク質を用いて thiol mixed- function oxidation (MFO) assay を行い、antioxidant activity (抗酸化活性)を調べた。

C. 研究結果/考察

生体が酸素を利用しエネルギーを産生する際、酸素分子がプロトンを受け取り水へ還元される過程で活性酸素種と呼ばれる中間体が発生する。細胞内に活性酸素を発生さ

せる刺激が酸化ストレスであり、細胞内のタンパク質、脂質、DNAなどを酸化し生体に障害をもたらす。このような酸化ストレスに対する生体防御機構として、グルタチオン、チオレドキシンとその関連酵素群、スーパーオキシドジスムターゼ、カタラーゼなどが知られている。Prxは還元下でペルオキシダーゼ活性を示すタンパク質で、活性部位のシステイン(Cys)を中心とするドメインの個数によって、1-Cys型と2-Cys型に分類される。現在まで原核生物から哺乳類までの幅広い生物層からPrxの遺伝子が単離されている。我々が得た多包虫Prx遺伝子のコードするタンパク質の推定分子量は約21kDaで、48および169アミノ酸残基にはPrx群で保存されているシステインが認められた。またSalinas, G.ら(1998)により*Echinococcus granulosus*から報告された2-Cys型Prxとは97%の同一性を示し、マンソン住血吸虫、オンコセルカ糸状虫、リーシュマニア原虫、ヒトなどから報告されているPrxとも高い同一性を示した。また大腸菌で作製した組換えEmPrxタンパク質はMFO assayで10 $\mu$ g/ml以上の濃度で抗酸化酵素活性を示した。現在、組換えタンパク質を用いた生化学的解析を継続するとともに、幼虫内での局在、そして診断抗原としての有用性を検討中である。

#### D. 結論

中間宿主体内での多包虫は好氣的環境に寄生し、また常に宿主由来の活性酸素種に起因する酸化的ストレスに常に曝露されている。従って、我々はPrxが多包虫の抗酸化機構に重要な役割を果たしていると考えて

いる。

#### D. 研究発表

##### 1. 学会発表

- 1) Fujita O, Araki K, Ito A, Nozaki T. (2001) Biological characterization of a novel antigen, actin modulator protein, from *Echinococcus multilocularis* metacestode. 50<sup>th</sup> American Society of Tropical Medicine and Hygiene Annual Meeting. November 11-15, 2001. Atlanta, USA.
- 2) 藤田 修、野崎智義 *Echinococcus multilocularis* 幼虫組織から分離したアクチン結合タンパク質の生化学的性状および機能について、第71回日本寄生虫学会大会、2002年3月、伊勢原市
- 3) 藤田 修、河津信一郎、野崎智義 多包虫組織より分離した2-Cys型ペルオキシレドキシンの生化学的性状および機能について第72回日本寄生虫学会大会、2003年3月、久留米

厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）  
分担研究報告書

多包条虫、単包条虫および胞状条虫の代替終宿主の開発に関する研究

分担研究者 伊藤 守 実験動物中央研究所

**研究要旨** 中国産の齧歯類 *Rhombomys opimus*, *Meriones erythrourus*, *Cricetulus migratoriu* およびゴールデンハムスターを PA (酢酸プレドニゾロン) 処置し、多包条虫、単包条虫および胞状条虫の代替終宿主としての有用性を調べた。多包条虫感染実験では、ゴールデンハムスターでは 10 日まで *R. opimus* では 4 日まで、*M. erythrourus* では 3 日まで回収されたが、*C. migratoriu* では全く回収されなかった。単包条虫感染実験では、ゴールデンハムスターでは 4 日まで、*R. opimus* でも 4 日まで、*M. erythrourus* では 8 日まで、*C. migratoriu* では 3 日まで回収された。胞状条虫感染実験では、ゴールデンハムスターでは 5 日まで、*M. erythrourus* では 9 日まで、*C. migratoriu* では 2 日まで回収された。全体的には *R. opimus*, *M. erythrourus* の有用性が示唆された。

A. 研究目的

本研究はエキノコックスに対して感受性のより高い代替終宿主動物の検索を目的として、中国産の齧歯類 *Rhombomys opimus*, *Meriones erythrourus*, *Cricetulus migratorius* の有用性を検討した。特に、大型の齧歯類利用を考え、大型のスナネズミ類(*R. opimus*, *M. erythrourus*)を用いた。

B. 研究方法

実験に用いたすべての動物は PA (酢酸プレドニゾロン) した。単包条虫感染実験には中国で捕獲された *R. opimus* 3 頭、*M. erythrourus* 6 頭、*C. migratorius* 5 頭、さらにコントロールとしてこれまで代替終宿主として頻用されているゴールデンハムスター 7 頭を用いた。それぞれ原頭節 20,000 個を経口投与された。多包条虫感染実験には中国で捕獲された *R. opimus* 2 頭、*M. erythrourus* 5 頭、*C. migratorius* 5 頭、さらにゴールデンハムスター 7 頭を用いた。それぞれ原頭節 2,500 もしくは 5,000 個を経口投与された。胞状条虫感染実験には中国で捕獲された、*M. erythrourus* 5 頭、*C. migratorius* 4 頭、さ

らにゴールデンハムスター 6 頭を用いた。5 もしくは 10 虫体の囊虫頭節を経口投与された。すべての動物は経時的に剖検し、小腸に寄生する虫体数を比較した。

C. 研究結果・考察

今回用いたゴールデンハムスターはプレドニゾロン投与により感染症を引き起こし、多くの個体が実験の途中で早期に死亡した。単包条虫感染実験では、ゴールデンハムスターでは 4 日まで(<60 虫体)、*R. opimus* でも 4 日まで(<14 虫体)、*M. erythrourus* では 8 日まで(<13 虫体)、*C. migratoriu* では 3 日まで(<18 虫体)虫体が回収された。多包条虫感染実験では、ゴールデンハムスターでは 10 日まで(<3 虫体)、*R. opimus* では 4 日まで(<14 虫体)、*M. erythrourus* では 3 日まで(<17 虫体)虫体が回収されたが、*C. migratoriu* では全く虫体は回収されなかった。胞状条虫感染実験では、ゴールデンハムスターでは 5 日まで(<1 虫体)、*M. erythrourus* では 9 日まで(<2 虫体)、*C. migratoriu* では 2 日まで(<3 虫体)虫体が回収された。